

國學院大學文学部考古学実習報告 第48集

長野県安曇野市

穂高古墳群

THE HOTAKA TUMULI

2012年度 発掘調査報告書



2013. 7

國學院大學文学部考古学研究室

Archaeological Research
at
the HOTAKA TUMULI



July , 2013

Department of Archaeology,
Faculty of Letters,
Kokugakuin University

長野県安曇野市

穂高古墳群

THE HOTAKA TUMULI

2012年度 発掘調査報告書

2013. 7

國學院大學文学部考古学研究室

緒 言

2009年に考古学実習の対象地として長野県安曇野市の穂高古墳群の発掘調査を始めてから、今日までに4年の歳月が経過しました。

安曇野市にある穂高古墳群は長野県内有数の古墳群として知られ、古くから様々な研究者や研究機関・行政機関によって発掘を含めた調査研究が行われています。國學院大學考古学研究室では考古学専攻生に対する授業の一環として、1980年以来様々な地域の遺跡で発掘調査を行ってきました。夏休み中の10日間という限られた期間での調査という制約のなかで、発掘・測量・実測・写真・埋め戻しなどの作業とともに、発掘後の遺物整理・写真整理・遺構図整理・遺物整理・原稿執筆・図版作成・校正・刊行など、考古学を学ぶ者としての最低限の技術と義務を習得することを目的としてきました。考古学を学ぶ者にとって、国民共有の財産である文化財である遺跡を発掘したなら、その成果を報告書という形で刊行して世に問い、個々の遺跡の個別情報と歴史上の意味合いを学界のみならず国民全体のものにする義務があることを肝に銘じるためにも大事なことを考えています。

10日間の発掘実習期間中には晴天ばかりでなく荒天もあります。加えて、発掘最終段階には砂で埋め戻して発掘以前の状態に戻しているため、発掘開始に当たっては前年度に埋め戻した砂を除去し、前年度の最終段階に復元することが必要で、この埋め戻しと埋め戻し以前の状態の復元に3日間以上係るため、実質的に発掘に充てられるのは7日間以下となります。かつて考古学実習を東京都三宅島で実施した時に台風に見舞われ、実質4日間しか作業ができず、大雨の中で平面実測を取行せざるを得なかったこともあり、安曇野でも一昨年には8月後半に行わざるを得なかったこともあり、雨に祟られて作業がほとんど進まなかったこともありましたが、これまで発掘調査を継続することができたのも、ひとえに各関係機関と先学諸研究者のご支援があったからであり、関係機関・関係者に深くお礼申し上げます。

10日間のできることに限界があります。特に、穂高古墳群に属するすべての古墳は安曇野市の史跡に指定されており、その現状変更は文化財保護法によって厳に成められており、現状を変更する発掘調査が可能となるためには、様々な法的手続きが必要となります。これらの困難な状況の中で我々が発掘調査できるように支援をいただいた長野県教育委員会、安曇野市教育委員会には心より感謝いたしております。また、出土遺物のX線撮影には帝京大学文化財研究所の協力をいただきました。文末ですが、御礼申し上げます。

2013(平成25)年6月1日

國學院大學文学部考古学研究室

吉田 恵二

例 言

1. 本書は長野県安曇野市穂高柏原に所在する穂高古墳群F9号墳発掘調査の記録である。
2. 本調査は2012年度國學院大學考古学調査法(考古学実習)の一環として、2012年8月4日から同年8月12日までの9日間にわたり実施したものである。
3. 本調査は赤井益久(國學院大學学長)が主体者となり、吉田恵二(文学部教授)が担当した。現地調査は吉田および深澤太郎(研究開発推進機構助教)・小林青樹(國學院大學栃木短期大学教授)・中村耕作(文学部助手)が指導にあたり、枝野孝彦・加藤大二郎(大学院ティーチングアシスタント)の下、考古学実習生11名・特別参加生25名が参加した。
4. 現地調査および整理作業においては多数の機関や個人から協力を得た。芳名を巻末に記して感謝の意を表す。
5. 実測図、その他の諸図版作成、および写真撮影は考古学実習生が主体となって行った。
6. 鉄製品のX線写真は、帝京大学文化財研究所、鈴木稔、櫛原功一、小澤美和子(同所)の協力を得て、同所の機材を用いて深澤が撮影した。
7. 出土した動物骨の同定・記載は、西本豊弘(本学大学院客員教授、国立歴史民俗博物館名誉教授)・浪形早季子(神奈川県教育委員会)の協力を得た。
8. 本書の編集・執筆は、吉田・深澤・中村の指導の下に実習生が分担協議した。
9. 個々の古墳の表記方法については、過去の調査研究に準拠して「所属支群を示すアルファベット+通し番号」で松川村所在古墳を除くすべての古墳を表記し、またそれ以外に別称を持つ場合には過去の文献との整合を容易にするため、括弧付けでこれを表記した。
10. 今回発掘調査を行ったF9号墳はF10号墳とともに2基の総称として「二つ塚」の別称を持っている。そのため、どちらかを単独で表記する場合に別称を表記するのは適当ではないと判断し、また文章中で多用することを考慮して、本報告書では両古墳に限り別称の表記を省略する。
11. 安曇野市域では2005年の安曇野市発足に至るまで数度の合併・改称が行われている。1889年、市町村制施行に伴い南安曇郡東穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が発足。1921年に南安曇郡東穂高村が改称して南安曇郡穂高村が発足した。1954年に南安曇郡穂高村・西穂高村・北穂高村・有明村が合併して南安曇郡穂高町が発足したのち、2005年には南安曇郡豊科町・穂高町・三郷村・堀金村と東筑摩郡明科町が合併して安曇野市が発足した。本文中では、旧町村名の表記が必要な場合のみ「旧」を頭につけてこれを表記した。

目 次

緒言

例言

目次

第I章 調査・研究の目的

- 第1節 調査に至る経緯・調査の目的……………(豊島寿呂子) 1
- 第2節 穂高古墳群の位置づけ……………(太田哲平) 1
 - (1) 長野県内の古墳と穂高古墳群…………… 1
 - (2) 群集墳の研究と穂高古墳群…………… 3

第II章 発掘調査日誌……………(稲垣大地) 4

第III章 遺跡の位置と歴史的環境

- 第1節 地理的環境……………(吉澤花織・島海朱理) 6
 - (1) 松本平の地形と形成…………… 6
 - (2) 穂高地域の地形と地質…………… 7
- 第2節 歴史的環境……………(曾我真実子・森田光) 9
 - (1) 旧石器時代…………… 9
 - (2) 縄文時代…………… 9
 - (3) 弥生時代…………… 11
 - (4) 古墳時代…………… 14
 - (5) 古 代…………… 17
 - (6) 中 世…………… 21
- 第3節 穂高古墳群の概要……………(渡邊里美) 21

第IV章 穂高古墳群F9号墳の調査

- 第1節 調査地の概要……………(池田雅英・鈴木志穂) 29
- 第2節 調査の経過……………(鈴木志穂) 29
 - (1) 2011年度までの調査成果…………… 29
 - (2) グリッドの再設定…………… 31
 - (3) 2012年度の調査経過…………… 31
- 第3節 石室・調査区土層……………(鈴木志穂) 31
 - (1) 石 室…………… 31
 - (2) 調査区土層…………… 33
- 第4節 出土遺物……………(岡野賢人) 34
 - (1) 古墳時代～古代の遺物…………… 34
 - (2) 近世以降の遺物…………… 36

第V章 2012年度調査の成果……………(吉澤花織) 37

第VI章 おわりにあたって	38
---------------	----

引用・参考文献	39
発掘調査参加者・関係者一覧	44
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図 長野県の主要古墳と古代寺院	2	第8図 F9号墳と旧塚原配水池	29
第2図 松本平の位置	6	第9図 2010年度～2012年度調査区全体図	30
第3図 安曇野市周辺地質分布図	8	第10図 F9号墳石室実測図	32
第4図 烏川段丘分布図	8	第11図 今年度掘り下げ範囲	33
第5図 松本平の主要遺跡	13	第12図 土層断面図	33
第6図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡	23	第13図 F9号墳出土遺物実測図	35
第7図 穂高古墳群出土の主要遺物	25		

表 目 次

第1表 松本平主要集落遺跡の消長	12
第2表 穂高古墳群一覧表	26

写 真 図 版 目 次

図版1 F9号墳トレンチ全景(南から)	図版9 1 F9号墳前庭部西壁(東から)
図版2 F9号墳トレンチ全景(北から)	2 F9号墳前庭部東壁(西から)
図版3 1 F9号墳石室(北西から)	図版10 1 F9号墳D7・D8グリッド西壁(東から)
2 F9号墳石室(南から)	2 F9号墳D9・D10グリッド西壁(東から)
図版4 1 F9号墳奥壁(南から)	図版11 1 F9号墳A7・A8グリッド東壁(西から)
2 F9号墳石室(南東から)	2 F9号墳A9・A10グリッド東壁(西から)
図版5 1 F9号墳石室西壁(東から)	図版12 1 F9号墳発掘前全景(南東から)
2 F9号墳D1・D2グリッド西壁(東から)	2 F9号墳埋め戻し後全景(南東から)
図版6 1 F9号墳D3・D4グリッド西壁(東から)	図版13 F9号墳出土土器(S=1/2)
2 F9号墳D5・D6グリッド西壁(東から)	図版14 1 F9号墳出土遺物 S=2/3(13のみS=1/3)
図版7 1 F9号墳石室東壁(西から)	2 F9号墳出土鉄製品X線写真(等倍)
2 F9号墳A1・A2グリッド東壁(西から)	
図版8 1 F9号墳A3・A4グリッド東壁(西から)	
2 F9号墳A5・A6グリッド東壁(西から)	

第Ⅰ章 調査・研究の目的

第1節 調査に至る経緯・調査の目的

國學院大學考古学研究室は、2009(平成21)年度から考古学実習の一環として、長野県安曇野市に所在する徳高古墳群の調査研究を実施している。徳高古墳群とは、安曇野市西部の烏川によって形成された扇状地上、標高600m～700mの山麓に点在する古墳の総称である。長野市の大室古墳群や松本市の中山古墳群などと同じく、中部高地の有力な後期古墳群で、A群～H群の各支群からなり、現在87基以上の古墳が確認されている。

学術誌における初見は、1890年(明治23)年の鷹野秀雄氏による記述の報告であった。その後、鳥居龍藏氏や大場磐雄氏の調査研究などにより、早くからその名は知られていたが、長らく本格的な調査は行われてこなかった。1940年代に長野県教育委員会によって古墳の分布調査が行われるも、1930年代に確認された数を大きく下回る結果となった。そして1964(昭和39)年から1979(昭和54)年にかけて、徳高町教育委員会が旧徳高町域内の古墳の分布調査と、確認された古墳に対する古墳名を記した石製標柱の設置を実施するなど、本格的な古墳群の保護対策が始まる。また1967(昭和42)年に行われた長野県教育委員会による調査では、旧徳高町内の古墳はA群～G群の7群に大別され、その全貌がようやく把握されるに至った。これだけの規模の古墳群でありながら、まとまった学術調査がない点を考慮し、1982(昭和57)年には『長野県史』編纂事業の一環として、岩崎卓也氏を中心とする筑波大学考古学研究室によって、一部の古墳の墳丘・石室・出土遺物の実測調査が行われた。1991(平成3)年にも『徳高町誌』編纂に伴い、桐原健氏がこれまでの報告や研究から個々の古墳群についてまとめ、また同年には三木弘氏によりE6号墳の調査も行われている。

このように、徳高古墳群に関しては、多くの調査研究上の蓄積が重ねられてきた。その一方で、各研究者・調査主体者の視点の相違や、土地開発などによる古墳の破壊・減少を原因として、調査年度によって古墳の総数に差が生じるなど、古墳群全体としての情報が把握しづらい状態である。また、これまでは徳高古墳群の中でも北に分布しているA群などの調査が中心であり、古墳群南部の調査はあまり行われていなかった。加えて、墳丘・石室・出土品を一体とした総合的な調査例も少ないというのが現状である。

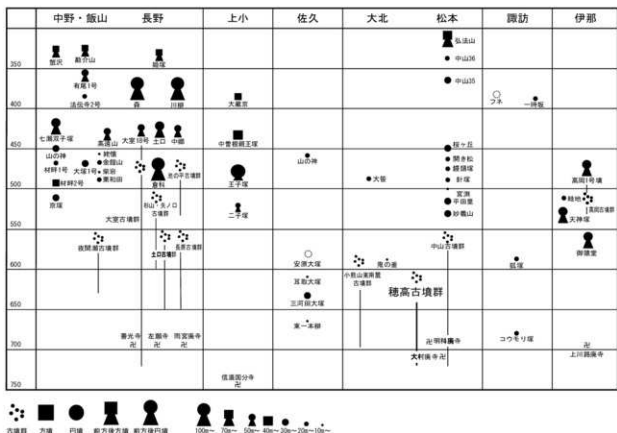
以上の状況を踏まえて当研究室では、継続的な学術調査および古墳群を構成する個々の古墳の現存状況を確認することで、徳高古墳群が持つ群集としての地域性、あるいは独自性を明確にしていくことを目的として調査計画を立てた。そして、徳高古墳群南部に分布するF群のうち、F9号墳・F10号墳を調査対象として調査を開始。調査4年目となる今年度は、埋葬施設の構造を把握することを主目的として、前年度に引き続きF9号墳石室内部の発掘調査を実施した。現在F9号墳・F10号墳は、安曇野地域の環境保全の拠点として整備された「国営アルプスあづみの公園」内という立地にあり、この先も土地開発の影響を受ける可能性は低いと考えられる。今後も遺跡を保全するとともに、徳高古墳群の歴史的意義を後世へと伝え、活用していくことが大切である。

(豊島)

第2節 徳高古墳群の位置づけ

(1) 長野県内の古墳と徳高古墳群

長野県には、伊那・松本・佐久・長野の4つの盆地があり、それぞれ南信・中信・東信・北信に区分され、独自の地域圏をなしている。県内で確認されている古墳は約3000基の古墳が存在し、全体の約70%は長野盆地と伊那盆地に分布している。長野県内最古の古墳は、4世紀前半(松本市教育委員会編1993d)に築造されたとされる松本市弘法山古墳である。その後、松本盆地では中山35号墳・中山36号墳が続けて築造されていたものの、大型首長墳を認めることはできない。一方、長野盆地では前期古墳の多くが分布しており、主な古墳としては飯山市助勘山古墳、中野市蟹沢古墳、長野市川柳将軍塚古墳・姫塚古墳、千曲市森将軍塚古墳などが知られている。



第1図 長野県の主要古墳と古代寺院

(國學院大學文学部考古学研究室編2011; 小林1997をもとに加筆して作成)

森将軍塚古墳や川柳将軍塚古墳が築造された前期後半には、墳丘形態が前方後方墳から前方後円墳へと転じ、墳丘の規模も大型化する傾向がみられる。中期以降も、長野盆地中央部を中心に前方後円墳が築造され、中野市七瀬双子塚古墳・高遠山古墳、千曲市土口将軍塚古墳・倉科将軍塚古墳などの大型前方後円墳が営まれた。一方でこの時期になると各地で円墳が集中的に築造されるようになる。松本市の桜ヶ丘古墳・針塚古墳も円墳の増加の一例である。後期には、分布の中心が伊那谷に移る一方、地域によっては徐々に大型の古墳は姿を消して、これまでよりも小規模の円墳が盛んに造られるようになり、長野市大室古墳群、松本市中山古墳群、安曇野市穂高古墳群のような古墳群が形成されていった。さらに、5世紀後半から前述した大室古墳群を中心として長野市長原古墳群などの積石塚が築造される。

松本盆地には、300基以上の古墳が確認されており、松本市の中山古墳群では現在約40基の残存が確認されている。安曇野市の旧穂高地域にも小規模の円墳約80基以上が点在しており(穂高町・穂高町教育委員会編1989)、穂高古墳群と呼ばれている。知られている事例では、円墳のものがほとんどであり、内部主体では一部の例外を除いて横穴式石室が用いられており、馬具や須臾器などを出土している古墳が認められている。

その後畿内では古墳の築造が大化の薄葬令によって制限されるが、地方でも権力の象徴が寺院の建築に移行し、急速に寺院が建立されるようになる。穂高古墳群の対岸にある安曇野市明科廃寺からは7世紀後半の瓦が確認されており、長野県内最古の寺院と考えられている。このほかにも長野県内には、長野市の善光寺とその周辺、千曲市の雨宮廃寺、須坂市の左願寺廃寺、飯田市の上川路廃寺など、7世紀後半代に建立された初期仏教寺院が確認されている(上田市立信濃国分寺資料館編2005)。

(2) 群集墳の研究と穂高古墳群

古墳研究史のなかで、群集墳の出現は、後期古墳の指標の1つとなっている(森・石部1962)。古墳を群として捉える研究は戦前にもあったが、近藤義郎氏が『佐良山古墳群の研究』(近藤編1952)のなかで、「古墳時代後期における横穴式石室をもつ小円墳群」と、群集墳を定義したことにより、「群集墳」という術語が定着した。この群集墳に家父長制の発達性を見出した近藤氏の見解は、新たな群集墳研究の魁となった。これに対して西嶋定生氏は、群集墳の成立を、古墳成立におけるヤマト政権による擬制的同族関係(カバネ制)の拡大過程とした(西嶋1961)。

群集墳の性格の理解についての研究では、群集墳を構成する単位群・小支群・支群・古墳群とのつながりをそれぞれ戸・里・郡・クニに対応させた向坂綱二氏(向坂1964)や、墓道で区分される単位群を家族と対応させ、その構成を論じた水野正好氏(水野1970・1975)、前・中期の大型古墳との対比による群集墳の形成を指摘した白石太一郎氏(白石1973)、群集墳を横穴式石室をもたない小型墳墓と区別するために古墳時代前・中期の群集墳を古式群集墳、後期の群集墳を後期群集墳または新式群集墳などといった区分を墳形や埋葬施設から、さらに定義を細分化し、群集墳としての対象の確立を問題にしてきた石部正志氏(石部1980)、和田晴吾氏(和田1992・2007)などの研究が挙げられる。

穂高古墳群における研究も主に古墳群の形成過程や被葬者、周辺集落などの関連および古墳の単位群についての分析などに着目されてきた。岩崎卓也氏・松尾昌彦氏・松村公仁氏は、A・B群を中心とした石室や出土遺物の実測を行い、築造年代の考察を行った(岩崎・松尾・松村1983)。桐原健氏は支群ごとに古墳群周辺の集落遺跡と対応させて被葬者の居住地の復元の試み(桐原1991・2004)。また、三木弘氏はE6号墳や礎石^{せきいし}墓^{かぶ}の出土資料を再検討した上で、穂高古墳群をめぐる研究成果を概観し、古墳群形成時期を6世紀後半から7世紀代、追葬は少くとも8世紀代までは行われていたことを明らかにした。また、各支群の石室規模を5類に大別し、石室の規模が卓越する古墳を中心に、小集団によって水系ごとに墓域が形成されたと考察している(三木・寺島・西山1987、三木1990・1991・2006)。これらの研究により、各古墳群の実態が明らかになるようになった。

また、群集墳から出土する遺物の研究については、主に被葬者の追究がなされてきた。近藤義郎氏は古墳時代後期における群小古墳出土の金銅について、周辺遺跡との対比により、その被葬者を農民などの下位層と想定した(近藤1966)。また、新納泉氏は地域間や群集墳内の格差を装飾大刀を中心として、群集墳内の副葬品から比較した(新納1983)。一方で、穂高古墳群では首長墓は確認されていないが、1987年に奈良県藤ノ木古墳の発掘調査で出土した金銅製冠に表現されている鳥形の装飾と酷似した「鳳凰形銅葉」とされる遺物が、穂高古墳群のいずれかの古墳から出土したことが明らかになっている。この冠の出土からは、古墳群内における副葬品からみた階層差が穂高古墳群に存在した可能性を窺うことができる。両者の鳥形は非常に形が似ており、藤ノ木古墳出土の金銅製冠の一部ではないかとも言われている(穂高町・穂高町教育委員会編1989)。金銅製冠はあまり出土例がなく、全国でも三十数か所程度しか確認されていない。これらは5世紀後半から6世紀にかけて築造された古墳から出土しており、松本平でも5世紀中頃の桜ヶ丘古墳から金銅製冠が出土している(松本市教育委員会編2003b)。冠は権力を表す象徴として使用されていたが、この当時はまだ冠位制度が成立しておらず、各地で出土している冠にもほとんど共通点が見られない。古墳からの冠の出土については被葬者の「官僚化」を表すという小野山節氏の説があるが(小野山1975)、穂高古墳群から出土した鳥形の冠飾りは、この地域の政治的様相や被葬者の実態を理解する上で重要な資料である。

このように、群集墳研究に関しては、被葬者や副葬品の観点から、古墳時代後期における社会構造について研究がなされてきた。群集墳は、古墳の被葬者が今までの首長層を中心とする上位の社会階層から、それら以外の下位の社会階層へと拡大するという社会構造の変質を知る上で重要な指標となる。なお、穂高古墳群では当該の地域からは前方後円墳などを主とした首長墓などの大型古墳が確認されず、分布している古墳のほとんどのものが円墳である。我々がこの穂高古墳群を調査する上で、これら古墳群の形成やその被葬者などの理解の問題は、当地域における在地社会の動向を解明する上で考えなければならない問題である。(太田)

第Ⅱ章 発掘調査日誌

8月4日(土) 晴れ

発掘調査初日から天候に恵まれ、すぐに現場での作業に取り掛かった。前日に徳高へ到着した先発隊は「国営アルプスあづみの公園」の管理センターを訪ね、調査開始前の挨拶をしたのち、昨年度までの調査区を復元するための測量を行った。また、測量と並行して表土の除草、昨年度に埋めた土壌の撤去を行った。本年度の実習生は13時30分頃JR大糸線徳高駅に到着し、実習期間中の滞在先である「ビジネスインあづみ野」で支度したのち、現場で土壌撤去作業に入った。

8月5日(日) 晴れ

前日に引き続き土嚢を取り除き、昨年度調査終了時の状態まで復元した。状態確認のため南北から調査区全景を撮影したのち、測量担当班は光波測距儀でグリッドを設定した。

午後は石室の床面確認のためにC8～C10グリッドまでを残して、掘り下げ作業を開始した。はじめのうちは固い土や大きな石が多かったが、次第に柔らかい土や小さな石が多くなった。作業開始後間もなくして、B7～B10グリッド付近から多くの遺物を確認した。

8月6日(月) 雨/曇り

天候が不安定な中、調査面の掘り下げや出土遺物の写真撮影、遺物の取り上げに分かれてそれぞれ作業を進める。午前の作業終了際にB7グリッドから刀子が出土した。また、B1グリッドの奥壁付近に横たわる大きな石の下からは動物の骨とみられる遺物を発見した。

午後からは雨が降り出したため、周辺の木々にシートを巻きつけ、屋根を作り作業を行う。しかし、雨が次第に強く降り始めたことから15時頃に作業を中止した。

8月7日(火) 晴れ/雨

調査4日目～6日目にかけて実習生は3班に分かれ、交替で大室古墳群・森将軍塚古墳・弘法山古墳・中山古墳群・長野県立歴史館・松本市立考古博物館などを見学をした。

調査現場では、昨日B1グリッドでの作業の妨げとなっていた石を撤去する。また、石室側壁を確認するために露出部分の清掃、昨日発見した動物の骨の取り上げ作業も行った。一方、午後からは天候が崩れたため、作業を中止した。

8月8日(水) 曇り/晴れ

本日は、近隣の徳高北小学校の教員3名が発掘に参加し、C8グリッドで水晶製切子玉を発見した。なお、石室内の奥壁側に転落した石材を取り除いた結果、現在掘り下げを行っている面において最大で10cm程の高低差が生じたため、高さが一定になるように掘り下げた。また、C1グリッドにおいて石室本来の床面かと思われる明褐色の硬化面が確認された。





8月9日(木) 晴れ

引き続き、全体的に高さを合わせて掘り下げを進め、床面と考えられる部分が露出したC1グリッドの調査面を基準にして、石室崩壊後の埋土のみ取り除くよう掘り下げた。そして、土の色に変化が見られた箇所から作業を終了した。

午後の作業では、B5グリッドから刀子を発見する。また、翌日には調査区全景の写真撮影が予定されていることから、掘り下げ作業に並行する形で清掃作業を念入りに行った。

8月10日(金) 晴れ

写真撮影のため調査区の清掃作業を行い、トレンチ全景の撮影を行う。また、石室構造確認のために様々な角度からの撮影も行った。その間撮影担当班以外の参加者は、A1号墳(陵塚)・D1号墳(魏石の鬼窟)・徳高郷土資料館を見学した。撮影班は午後もし引き続き撮影を行ったが、陽の傾きにより影が生じ始めたため、ブルーシート等を張ることに影のむらを防ぎつつ撮影を続けた。撮影は困難を極めたが、多くの卒業生の方々に協力を頂き、本日の写真撮影は無事終了した。



8月11日(土) 曇り/雨

天気予報では雨の予定であったが、午前中の天候が安定していたことから、トレンチ東壁・西壁からの撮影を行う。その間、撮影担当班以外の参加者は埋め戻し用の土嚢を作成した。また、安曇野市豊科郷土博物館主催の「古墳発掘調査見学会」が行われ、30名ほどの見学者が訪れた。

午後からは天候が崩れたものの、休日ということもあり多くの見学者が古墳を訪れた。また本日より、実習生は図面の作成を開始する。作成開始後間もなくして國學院大學栃木短期大学より小林青樹教授が到着され、図面作成を御指導頂いた。



8月12日(日) 曇り/雨

引き続き図面の作成を行う。午後からは天候が崩れはじめたが、図面の作成が無事終了し、15時頃には調査区の埋め戻しを開始する。埋め戻しに際しては、多くの先生・卒業生の方々の協力を頂き、17時30分頃に埋め戻し、全景写真の撮影も完了する。そして吉田恵二教授の終了宣言により、本年度の現場での作業は終了した。



8月13日(月) 曇り

本日は撤収のため、宿舍を引き払う。調査期間中お世話になった宿舍を隅々まで丁寧に清掃した。また、次の現場での作業に備えて念入りに機材の点検も行い、確認作業の終了した順に機材を運搬車に積み込んだ。現場での作業終了を記念して、最後に宿舍前で集合写真を撮り、安曇野地域の特産物である山葵の畑を見学したのち11時頃、穂高駅にて解散した。(稲垣)



第三章 遺跡の位置と歴史的環境

第1節 地理的環境

(1) 松本平の地形と形成

長野県は本州の中央部に位置する内陸の県であり、南北約212km、東西約120km、総面積約13,562km²で、全国で4番目の広さを誇る。山地が大半を占める長野県内には、主要河川流域にいくつかの盆地が存在している。その一つである松本平に、調査地である穂高古墳群が所在する。松本平は楕円形の地形を形成しており、北端の大町市から南端の塩尻市まで幅を広めながら延びていく盆地であり安曇野市明科地域を底にした扇状地の地形をなしている。その大きさは、南北約50km、東西約10km、面積は480km²で、内陸盆地として日本では第1級の規模をもち、北アルプス(飛騨・木曾・赤石山脈)および筑摩山地から流出する多くの河川の扇状地の複合によって形成されている。明科地域付近には犀川、会田川、高瀬川などの河岸段丘が存在し、河川付近には多数の遺跡が現存している(第2図)。



第2図 松本平の位置

松本平の開発は古く、平安時代初期には信濃の国府が松本市郊外に設置され、豊科地域から穂高地域にわたる扇状地末端部はすでに奈良時代に水田が開かれていた。北アルプス東麓の扇状地上の農業開発は、中世・近世を通じて積極的に進められ、松本盆地の農業は歴史時代以来一貫して米作への指向が強く、盆地の耕地利用は地形、水利と密接な関係があり、梓川以北の扇状地末端部は歴史的に最も早くから水田化され、次いで扇頂部にも稲作が行われた。その後、扇状地の開墾が進んだが水利が悪く、扇中央部はほとんど桑園になった。しかし、この桑園も、養蚕不況以後は徐々に水田化されていった(日本地誌研究所編1972)。

松本平には特殊な地帯であるフォッサマグナが存在する。フォッサマグナにはいくつかの構造線があり、西縁にあたる糸魚川-静岡構造線が通っている。新潟県の糸魚川付近から姫川に沿って南下し、長野県の大町・松本・諏訪をへて、山梨県西部から静岡県付近まで、本州の中央部を南北に横断する大断層である。西側には標高3000m級の飛騨山脈が約90km連なっており、おもに花崗岩と古生代(約5億年前～3億5000万年前)に形成された地層から成っている高山性山地である。概形は、中央に海拔2700m～2800mの高い頂面を持つ南北にのびた台地である。この山脈に激しい侵食作用で削り出された岩屑は、東斜面では横断谷の高瀬川、梓川によって運ばれて松本平にもたらされ、それぞれ扇状地をなしている(穂高町誌編纂委員会1991a)。

松本平の形成には、前述した飛騨山脈とフォッサマグナが深く関係していると推測される。日本列島の前身となる陸地は新生代古第三紀(約6500万年前～2300万年前)まで東西に分かれており、その間には海が広がっていた。フォッサマグナは、この東西の陸地に挟まれた海溝が新生代新第三紀(約2300万年前～250万年前)から飛騨山脈の隆起に伴い、岩石などが堆積し始めたことで作られたものである。東側には標高約1000m～1500mの緩やかな丘陵地帯である筑摩山地が存在し、フォッサマグナの中央部を占める高地である。この山地は海底火山活動で堆積した新生代新第三紀中新世(約2300万年前～670万年前)の内村累層(緑色に変質した玄武岩～安山岩質の火山岩類・砂岩・礫岩の層)、別所累層(主に黑色泥岩からなる層)の堆積岩累やこれを貫く深成岩(石英閃緑岩)や半深成岩(閃緑岩)、さらにこれを覆う新第三紀末～第四紀初頭(約340万年前～160万年前)の堆積物の安山岩質火

砕岩類から形成されている。この山地がフォッサマグナでも初期に隆起・陸化したと考えられることから、中央隆起帯と呼ばれる。第四紀になると広域隆起が進み、フォッサマグナから飛騨山脈にかけて平坦面が形成された。そして、中期更新世になると、再び、糸魚川-静岡構造線沿いに一部は隆起が進み、現在の松本平の原形が地溝状に陥没した。その、陥没地帯に、北アルプスから多量の砂礫が運ばれ、平に埋め立てられて出来あがったのが現在の松本平である(徳高町誌編纂委員会1991a、日本地誌研究所編1972、松本市編1996a、安曇村編1998、日本地質学会編2006、町田ほか編2006、太田ほか編2010)。(吉澤)

(2) 穂高地域の地形と地質

安曇野市周辺の更新世以前の地質は大別して北西の穂高地域、南西の堀金・三郷地域、東側の明科地域の3種類に分けられる。穂高地域は飛騨山脈の山岳地帯の有明花崗岩(古第三紀初期)、烏川扇状地第一段丘の梨ノ木礫層(更新世中期)、烏川沿いの波田礫層(更新世後期)である。堀金・三郷地域は泥岩・砂岩・花崗岩からなる梓川層群(ジュラ紀)、波田礫層とその東に分布する森口礫層(更新世後期)によって構成されている。梨ノ木礫層は角のとれた比較的径の小さい礫が厚さ30m~50mほど堆積しており、通常では塩尻市荒馬梨ノ木の奈良井川左岸の丘陵、朝日村小野沢の須川右岸に分布しているが、烏川扇状地の第一段丘として存在していた。波田礫層は盆地内部~南西部では波田段丘を形成して盆地内に広く分布し、大量の円礫や砂が厚さ50m~80mほど堆積したものである。森口礫層は亜円礫を中心に厚さ20m~30mほど堆積している。犀川を挟んだ明科地域は礫岩・砂岩・泥岩(新第三紀)の占める割合が最も多い(越崎2012、松本盆地団体研究グループ1977、町田ほか編2006)(第3図)。

松本平には飛騨山脈や筑摩山脈から流れ出る河川によっていくつもの扇状地が作られているが、明科地域はこれらの河川の集合場所であり松本平と善光寺平を結ぶ水運陸運の要所である。北からは高瀬川、南からは犀川が旧明科町押野崎で合流し、西からは穂高川、その下流では東から会田川、潮沢川などが流れ込み日本海を目指して北流する。穂高地域では飛騨山脈を源とした北部を流れる中房川と南部を烏川が主要河川になっている。この河川流域には沢や引水した堰が多数存在し、山麓では多数の扇状地を形成しており、穂高古墳群は扇状地のなかでも中房川扇状地、烏川扇状地を中心に分布している。

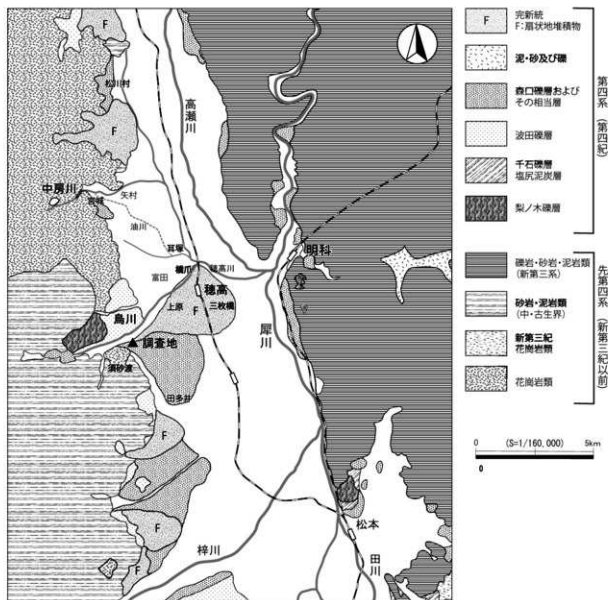
中房川扇状地

中房川は全長約16.1km、山地内の流域面積は約57km²である。中房川は浸食活動により岩盤を削られたV字谷を形成しており、中房川流域には有明山花崗岩と呼ばれる岩盤地帯が存在する。このような花崗岩類を中心とした礫は下流へ運ばれ、山岳地帯の出口である有明地区の宮城から矢村周辺の河床には巨大な河床礫がみられる。穂高地域ではこの花崗岩礫を古墳の石室の石組や、石造文化財に指定されている有明山神社の石鳥居など様々な場所で古くから用いてきた。

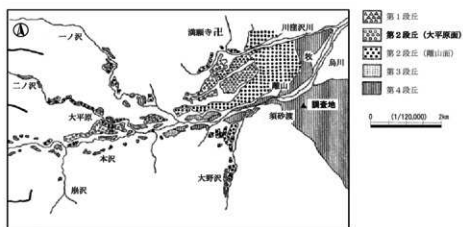
中房川扇状地は扇頂が宮城の標高750m地点にあり、北は松川村から芦間川の downstream、南は小岩岳南方から有明地区の富田と橋爪北方へ広がっている。面積は約23km²で、有明地区の平坦地のほぼ全域を占めている。複合扇状地であるが他の扇状地に影響されることはなく、ほぼ180度に広がり、全体が平行四辺形に近く北西-南東方向に長軸をとって穂高川に向かっている。この扇状地を形成しているのは花崗岩の砂礫で、中央を貫流する用水瓶の油川を境として北側の扇頂から扇尖は耕作が困難で樹木帯が続いている(仁科1991)。

烏川扇状地

烏川は全長約16km、蝶ヶ岳から流れる蝶ヶ沢が本流で山地内の流域面積は約69km²である。須砂渡地区および西方の扇頂部より上流では基盤岩に対して狭くて深いV字状の谷を形成している。上流から中流域までは溪流を成しているが、上原地区北方を過ぎると、粗粒物質からできていた烏川扇状地に吸収されるために水量は激減する。河床には粘板岩・硬砂岩・チャートなど、中・古生界が占めており全体的に黒色の岩石が多い。また須砂渡地区より上流の烏川沿いには4段の河岸段丘が発達し、下流には広大な扇状地が広がっている。第1段丘の梨ノ木礫層は松本盆地地底に最初に堆積した崖線性の礫層であり、通常は盆地に深く埋もれているのが段丘として残っているものである。第2段丘は大平原と離山面の2か所に分布し、第1段丘を取り巻く形で発達している。第3



第3図 安曇野市周辺地質分布図 (松本盆地団体研究グループ1977を改変)



第4図 鳥川段丘分布図 (伊藤1983を改編)

段丘は一ノ沢との合流付近から上流に連続して発達していた。第4段丘は峡谷部では浸食段丘であり、離山地区と須砂渡地区の古城山の間を抜けた下流部から烏川扇状地となる。須砂渡地区付近を扇頂とし、面積は約30km²である(重野1991・2003)。F9号墳は烏川扇状地の右岸側の扇頂部付近に立地している(第4図)。(島海)

第2節 歴史的環境

(1) 旧石器時代

松本平における旧石器時代の遺跡は、田川流域を中心とした地域にみられる。塩尻市の丘中学校遺跡・和手遺跡・青木沢遺跡・下り坂遺跡などが確認されている。

田川の左岸高位段丘面上に位置する丘中学校遺跡ではナイフ形石器、両面調整石器、搔器、彫器、石刃、石核、礫器、敲石が出土している。出土した石器は総計45点に及び、剥片を加えると100点前後になる(塩尻市教育委員会編1983a・1992)。和手遺跡からはナイフ形石器26点、槍先形尖頭器6点が広範囲から出土している(塩尻市教育委員会編1996・1997a・1997b)。青木沢遺跡ではナイフ形石器、尖頭器、神子柴型石斧、剥片が出土している。しかし、総計が11点と非常に少なく、遺構も検出されないことから後世の擾乱を受けてしまっていると考えられる(塩尻市教育委員会編1985)。下り坂遺跡では、ナイフ形石器1点のみの出土である(塩尻市教育委員会編1995)。

(2) 縄文時代

草創期

塩尻市の青木沢遺跡や数か所の遺跡から数点の有舌尖頭器が出土しているのみである(塩尻市教育委員会編1985)。平野や高原といった広大な平坦地に遺跡が立地するという傾向が続き、旧石器時代の遺跡と複合しているケースが多い。

早期

早期の遺跡は、高原や山麓の台地、河岸段丘上に多くみられる。大町市の山の神遺跡、塩尻市の向陽台遺跡・矢口遺跡など集落遺跡が営まれた。

山の神遺跡にみられる早期松本平の特徴的な遺物である異形部分磨製石器は、石鏃を大きくしたような形をしているが、石鏃のように鋭利に尖っていない。九州地方から東海・中部地方にかけての西日本の広い地域でも、現在までに数か所の遺跡から80点ほどの出土例のみという稀少な石器である。また、山の神遺跡では竪穴住居跡やコの字形になった方形配石跡、異形部分磨製石器が41点出土していることから全国的にも注目される(長野県埋蔵文化財センター編2003)。向陽台遺跡では、この時期の中部地方の土器型式を代表する押型土器が出土している。また、4軒の竪穴住居が確認されており、そのうち3号住居は径9mほどの円形を呈し、当該期の住居としては最大級の規模を有している。これらの遺構・遺物は、縄文集落の初期様相を良く示しており、その形成過程を明らかにするうえで全国的にも重要な意味をもっている(塩尻市誌編集委員会編1995)。片丘丘陵上に位置する矢口遺跡では竪穴住居が16軒検出され、松本平では最も古い炉を有する竪穴住居が環状に検出されていることから、縄文文化確立期の集落の解明に役立つものと考えられている(塩尻市教育委員会編1994)。

前期

前期は、松本平の縄文時代早期の遺跡数と比較すると増加傾向にあり、分布域は山麓・台地へ広がり、大町市の上原遺跡・藪沢1遺跡、松川村の有明神社遺跡、塩尻市の舅屋敷遺跡・女夫山ノ神遺跡などの遺跡が挙げられる。これらの竪穴住居は山麓や台地にみられ、早期にはみられなかった大規模な集落が展開している。当該時期には近畿地方・東海地方・関東地方の縄文文化が流入した。そのなかで前半には神ノ木・有尾式などの信州独自の土器が初めて誕生し、後半には関東地方の諸磯式の分布圏となる。

扇状地に立地する上原遺跡では環状配石と石積遺構が検出されている。遺物は約1万点におよぶ土器片や石器140点、未製品を含む珧状耳飾り32点が出土している(長野県文化財保護協会編1976)。同様に藪沢1遺跡や有明

山社遺跡でも未製品を含む多くの滑石製の球状耳飾りや原石が出土している。これら前期の球状耳飾りの製作遺跡は、大町市周辺及び壺川下流域に集中している(大町市史編纂委員会編1985、松川村教育委員会編1968)。異層敷遺跡では、縄文前期の住居が8軒、遺跡中央部で集石遺構が検出されている。遺物は深鉢、石鏃、尖頭状石器、匙形土製品、ミニチュア土器、ヒスイ製球状耳飾りで、集石遺構の一角からはベンガラによる彩色土器も出土している(塩尻市教育委員会編1982b)。塩尻市片丘丘陵上に位置する女夫山ノ神遺跡では、傾斜地に竪穴住居が27軒検出されている。前期から中期への住居変遷をみる上で、住居配列が弧状に配列された状態で検出は非常に重要である。また、前期末の土偶が1点出土している(塩尻市教育委員会編2002)。

中期

中期では特に後半を中心に大規模な遺跡が発見されており、遺跡数も縄文時代を通してこの時期が最も多い。この傾向は東日本全体で同様であり、縄文時代でもっとも繁栄した時期であるといえる。松本平の大規模な遺跡の多くは南部の東西の山麓に集中して確認されるが、数は西側の山麓の方が多い(鳥羽2010)。これは、東側の山麓が松本盆地を形成した際に生じた崖錐性の堆積物から形成された丘陵のために集落の範囲が制約されたのに対し、西側の山麓は奈良井川や梓川等の大河川によって形成された複合扇状地のために集落を広げることができたからと考えられる。

中期の主な遺跡は、西側の山麓では安曇野市の他谷遺跡・東小倉遺跡、山形村の淀の内遺跡・三夜塚遺跡、朝日村の熊久保遺跡があり、東側の山麓では安曇野市の塩田若宮遺跡・ほうろく屋敷遺跡、松本市の坪ノ内遺跡、塩尻市の俣原遺跡・北原遺跡・平出遺跡がある。

土器や石器が大量に出土したことから、人口の増加を窺うことができる。土器では、器台や釣手土器、壺などの器種分化も著しく、前半期には関東西部と共通する勝坂式が広がる。後半期の土器は松本平を中心に分布する唐草文土器が多くみられ、大規模な集落が多く営まれた。この時期には土偶なども土器と同様に地域色をもって分布している。また、中期末から後期にかけては、関東・中部一帯に住居の床面に平らな石を敷き並べる敷石住居が出現する。

烏川扇状地にある他谷遺跡では中期中葉から後期にかけての竪穴住居が45軒検出され、100軒以上の集落であったと推測される(穂高町教育委員会編2001b)。また、台地上一面に住居域と配石群が展開しており、1軒の住居址から広耳付壺形土器が出土している。北山麓山麓の黒沢川扇状地の東部に立地する東小倉遺跡では深鉢、浅鉢、釣手土器、ミニチュア土器、打製石斧、敲打器、磨石、凹石、石皿、土偶などが大量に出土し、竪穴住居も53軒検出されている(三郷村教育委員会編1999・2003・2005a、安曇野市教育委員会編2006)。淀の内遺跡では環状集落が検出され、ヒスイ製垂飾3点が出土している(山形村教育委員会編1997・2001)。三夜塚遺跡は、広大な遺跡範囲や多数採取された遺物から松本平最大の縄文中期の遺跡とされる(山形村教育委員会編1971・1972)。鎖川左岸段丘の中段に位置する熊久保遺跡では竪穴住居が30軒以上検出されており、その中には石壇を伴った事例も存在し、有孔鈔付土器や土偶などの遺物が出土している(朝日村教育委員会編2003)。

潮沢川が犀川に注ぐ地点の河岸段丘上にある塩田若宮遺跡では敷石住居から多量の土器・石器が出土した。出土遺物のうち石器では打製石斧の割合が高く、該期の生業との関わりが注目される(明科町教育委員会編1997、安曇野市教育委員会編2011)。犀川西岸の段丘上に立地するほうろく屋敷遺跡では竪穴住居が62軒検出されており、石器の未製品や剥片、チップ、石器の原石が多量に出土することから石器製作を担う集落址である可能性が大きい(明科町教育委員会編1991)。台地の西側斜面に立地する坪ノ内遺跡は縄文時代前期末から後期前半の長期にわたる集落址で中期の竪穴住居が6軒検出されており、復元可能な土器や土製品が大量に出土した。また土偶は中期のもので、43点出土しており、松本市内では最も多い(松本市教育委員会編1990a)。片丘丘陵上に位置する俣原遺跡では中期初頭から中期末までの竪穴住居が147軒検出されており、住居の配列は中央の広場を取り囲むように環状を成している(塩尻市教育委員会編1986b)。北原遺跡では中期の竪穴住居が4軒検出されたほか、多くの遺物が散布されていた(塩尻市教育委員会編1999)。松本平南端に位置する平出遺跡は縄文時代から古代まで続いた大集落であり、縄文時代では前期を除く早期から晩期まで続くが、そのなかでも最も栄えたのは中期

であり、88軒の竪穴住居が検出されている(平出遺跡調査会編1955、塩尻市教育委員会編1980・1981・1982a・1983b・1987b・2004・2006・2009・2010)。

後期

縄文時代後期には中期と比べて遺跡が急激に減少し、集落は山麓や台地から低地へ移る傾向にある。この時期の遺跡としては、安曇野市のほうろく屋敷遺跡・離山遺跡・北村遺跡、松本市の女鳥羽川遺跡・林山腰遺跡・荒海渡遺跡・葦原遺跡、塩尻市の御堂垣外遺跡・平出遺跡などが確認されている。そのうち、北村遺跡・林山腰遺跡・荒海渡遺跡・葦原遺跡・御堂垣外遺跡・平出遺跡で敷石住居が検出されている。

前半は中期の土器にみられた地域的な個性が稀薄化し、関東地方を中心とした堀之内・加曾利B式土器分布圏の外縁地域として包括されるが、後半には中部地方独自の高井東式を生み出す。また、完形の鉢等の土器を遺体の頭部に被せる土器被覆葬が長野県を中心に分布するなど、独自の要素も少なくない。

ほうろく屋敷遺跡では5軒の竪穴住居と大形石棒を埋納したものを含む多数の土坑が発見されている(明科町教育委員会編1991)。鳥川扇状地の扇頂部に所在する離山遺跡では大規模な環状列石状の集石遺構が検出し、焼土、骨片、石棒、土偶などが大量に出土している(穂高町教育委員会編1972)。また、井刈遺跡でも大規模な配石遺構が確認されている(大場・永峯・原1963)。犀川右岸に立地する北村遺跡では58軒以上の住居と墓塚が469基検出され、そのうち300基に人骨が認められている。また、敷石住居は29軒確認され、墓塚には墓壇上面に配石を伴うものが多く、完形土器の被覆葬も5例確認されている(長野県埋蔵文化財センター編1993)。女鳥羽川流域に立地する女鳥羽川遺跡は関東地方の文化を取り入れた土器や、後期では松本平最大の板状土偶の全身像が検出されている(松本市教育委員会編1972)。林山腰遺跡では柄鏡形敷石住居が1軒検出され、多くの石製品も出土しており、特に石棒は被熱を受けているものも出土している。他にも、土偶やミニチュア土器などの精神生活に関わる遺物が非常に目立つ遺跡である(松本市教育委員会編1988)。

晩期

晩期になると遺跡数はさらに減少する。遺跡の多くは河岸段丘や扇状地上によくみられる。この時期の主な遺跡には、大町市の一律遺跡、松本市のエリ穴遺跡・女鳥羽川遺跡、塩尻市の福沢遺跡などがある。

前半期には佐野式、後半期には浮線網状文土器という在地の土器群に加え、東北系の亀ヶ岡式土器や東海系の条痕文土器が流入し、2つの文化の影響を受けつつ弥生時代の土器に移行していく。また、後期から晩期にかけて、墓の周囲に平石を並べた石棺墓が関東甲信越にみられる。

松本平北端の木崎湖東岸に立地する一律遺跡では住居址が2軒確認されているほか、石棺墓も確認されている(大町市教育委員会編1990)。松本平東南部にあるエリ穴遺跡では、土製耳飾りが未成品を含めて約2600点出土しており、出土数は全国最多である。耳飾りのなかには精巧な透かし彫りや文様が施されたものも存在し、直径9cmをこえる環状を呈するものもある。また、竪穴住居は8軒確認され、この時期の住居が見つかったのは松本市内ではエリ穴遺跡だけである。配石遺構も24か所で検出されており、石の多くが火熱を受け、焼けた動物の骨も出土している(松本市教育委員会編1997b)。福沢遺跡では半身立像の土偶が出土している。これは弥生時代中期になって出現する扇状に開いた頭部を持つ半身立像に続いていくと考えられている(塩尻市教育委員会編1985)。

(3) 弥生時代

前期

弥生時代前期の集落遺跡は奈良井川の支流である田川の河岸や扇状地などに形成される。この時期の代表的な遺跡として、安曇野市のほうろく屋敷遺跡、松本市の針塚遺跡・境窪遺跡、塩尻市の下境沢遺跡などがあげられ、県内全域で条痕文土器が使用されたと考えられている(長野県編1983)。

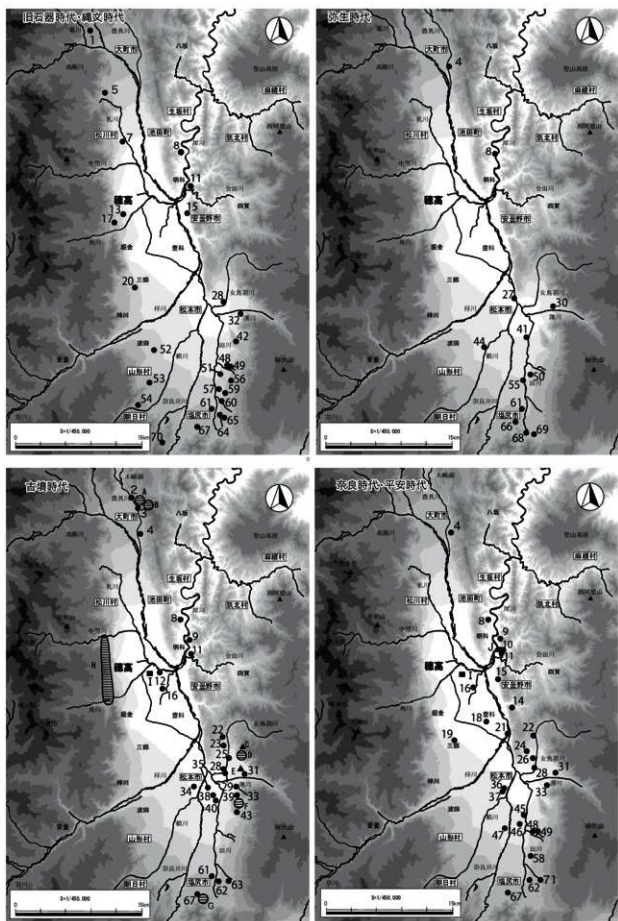
ほうろく屋敷遺跡では、配石を伴う再葬墓が16基検出されているが、当該期において竪穴住居などの生活痕の検出はない(明科町教育委員会編1991・2001)。また、東側の山麓と薄川扇状地に立地する針塚遺跡でも再葬墓が検出されている(松本市教育委員会編1993b)。鎖川周辺の沖積堆積層上に位置する境窪遺跡では、縄文時代的な

第1表 松本平主要集落遺跡の消長

地域	No	遺跡名	旧石器	縄文	弥生	古墳				
						前期	中期	後期	奈良	平安
大町市	1	上原		●						
	2	借馬			●	●				●
	3	来見原					●		●	●
	4	中城原			●	●			●	●
	5	山ノ神		●				●		
	6	一律		●						●
松川村	7	有明神社		●						
	8	ほうろく屋敷		●	●		●	●	●	●
安曇野市	9	上生野			●	●				
	10	湖神明宮前								●
	11	栄町・明科古殿屋敷						●		●
	12	藤塚						●	●	
	13	惣谷		●						
	14	上ノ山・葛藤平堂群								●
	15	北村							●	●
	16	馬場街道					●		●	●
	17	藤山		●						●
	18	吉野町館								●
	19	三角原								●
松本市	20	東小倉		●						
	21	平瀬				●		●		●
	22	岡田西裏						●	●	●
	23	下出口						●		●
	24	大村						●	●	●
	25	大村古屋敷					●	●	●	●
	26	大福原						●	●	●
	27	宮渚本村			●	●			●	●
	28	女鳥淵川		●						
	29	浪町					●		●	●
	30	針塚			●				●	●
	31	下原						●	●	●
	32	林山腰		●						
	33	千鹿頭北				●		●	●	●
	34	三の宮				●		●	●	●
	35	高宮					●			
	36	北栗						●	●	●
	37	南栗						●	●	●
	38	出川西						●		
	39	生基				●		●		
	40	出川南				●		●	●	●
41	百瀬				●		●		●	
42	坪ノ内		●							
43	向畑				●		●			
44	境窪			●					●	
45	平田本郷								●	
46	小原							●	●	
47	吉田川西							●	●	
48	小池							●	●	
49	エツ家				●				●	
50	エリ穴		●	●					●	
51	石行				●				●	
山形村	52	三夜塚		●						●
	53	塚の内		●						●
朝日村	54	殿久保	●	●						
塩尻市	55	丘中学校			●					●
	56	矢口	●	●						
	57	狐屋敷		●						●
	58	下境沢			●			●		●
	59	女夫山ノ神		●						●
	60	栗原								●
	61	和手	●		●			●	●	●
	62	中長				●		●	●	●
	63	竜神平					●			
	64	阿彌倉	●	●						
	65	堀沢								●
	66	壺宮			●					
	67	平出		●		●		●	●	●
	68	田川端			●					●
69	網ノ宮			●						
70	北原		●					●		
71	葛藤沢堂跡									

(国学院大学文学部考古学研究室編2012年改訂)

古墳・神社・寺院：A 来見原古墳群 B あま池古墳群 C 坂ヶ丘古墳 D 妙義山古墳群 E 針塚古墳
F 中山古墳群 G 平出古墳群 H 穂高古墳群 I 穂高神社 J 明科鹿寺



第5図 松本平の主要遺跡(遺跡番号・記号は前頁参照)

円形住居と弥生時代的な方形住居が混在する。また、方形周溝墓以前の礎床木棺墓や土器棺墓もみられ、前者からは人骨片が検出されている(松本市教育委員会編1998)。田川へ向かって傾斜する片丘陵上に位置する下境沢遺跡は前期末に出現する遺跡で、約30基の土壇群が検出されている。その1基からはほぼ完形の甕面付土器が出土しており、墓に伴う蔵骨器であったと考えられている(塩尻市教育委員会編1998)。

中期

弥生時代中期になると前期の集落が比較的短期間の継続に止まるのに対し中期集落は長期間継続し、さらに大規模化する傾向がみられる。中期前半には山間の小河川によって形成された小湿地や谷地に立地する。後半になると山間部から田川河岸段丘に立地が移行する。中期の主な遺跡には大町市の古城遺跡、松本市の百瀬遺跡・宮瀨本村遺跡などが挙げられる。中期後半には地域独自の土器文化が形成され、千曲川流域の栗林・百瀬式と天竜川流域の北原・恒川式の2つの文化に大別できる。松本平には、百瀬式土器の指標ともなっている百瀬遺跡が所在する(大阪府立弥生文化博物館編2001)。

沖積地の微高地に位置する古城遺跡では3軒の堅穴住居が検出され、そのうち1軒では貯蔵穴とされるものや炉が確認されている(大町市教育委員会編1991)。百瀬遺跡では、土器の種類に壺・鉢・甕・無頸壺・高杯のセットが揃っていることから、この時期の遺跡の典型的な例とされている(松本市教育委員会編1993f・2001)。宮瀨本村遺跡では、堅穴住居が144軒検出され、出土土器に弥生時代後期の型式もみられることから、長期間継続した大規模集落であったことがわかる。また、189基検出された土壇には人骨が出土しているものもあり、墓塚の可能性も指摘されている(松本市教育委員会編1986・1987・1989b)。

後期

弥生時代後期には田川流域に遺跡が分布し、松本平全体を通してみると塩尻市で遺跡が増加する傾向が見られ、塩尻市の柴宮遺跡・丘中学校遺跡・剣ノ宮遺跡・田川端遺跡・和手遺跡・向陽台遺跡・中挾遺跡・五日市場遺跡がある。中でも、丘中学校遺跡・剣ノ宮遺跡・和手遺跡・向陽台遺跡・中挾遺跡では方形周溝墓がみられ、五日市場遺跡では円形周溝墓も検出されている。土器は後期になると更に独自性を増す。千曲川流域では、ベンガラで外面を赤く塗った箱筒水式土器、天竜川流域では座光寺原・中島式土器が出現する。また、諏訪地域にも橋原式土器が出現して信濃に3つの文化圏が成立した。しかし、後半から古墳時代にかけて東海地方の土器が流入して土器文化圏は解体し、信濃の土器の地域色が失われた(大阪府立弥生文化博物館編2001)。

田川左岸にある沖積地帯の扇状地上に立地する柴宮遺跡ではほぼ完形の銅鐔が出土している(大場・原1961)。また、松本平ではないが近年中野市の柳沢遺跡からも銅鐔が出土している(長野県埋蔵文化財センター編2012)。丘中学校遺跡では、ガラス玉と鉄釧を埋納した方形周溝墓が検出されている(塩尻市教育委員会編1983a・1992)。剣ノ宮遺跡では非常に規則正しく並んだ方形周溝墓が検出されている。そのすぐ西側に田川端遺跡という集落が展開しており、ガラス玉の装身具が226点出土し、遺骸を埋葬したと思われる部分から腕輪が出土している。こうしたことから剣ノ宮遺跡と田川端遺跡は両遺跡を合わせて一つの巨大な集落であったと考えられる(塩尻市教育委員会編1987a)。また、和手遺跡でも堅穴住居と方形周溝墓がセットで検出されている。このような住居群と方形周溝墓がセットで検出されるのは田川流域に展開していた集落の大きな特徴である(塩尻市教育委員会編1988b)。

(4) 古墳時代

松本平では古墳時代前期に大規模な集落が展開した松本地域を中心に大町地域・安曇野地域・塩尻地域にも集落が展開し、付近の山麓に古墳が造営された。中期や後期にも盛んに古墳が造営されたが松本平における中期から後期にかけての集落遺跡は少なく、主に有力な集落の近くに多くの古墳が造営された。

大町地域

<集落遺跡>

借場遺跡、来見原遺跡、中城原遺跡などの集落遺跡が営まれた。このうち借場遺跡は鹿島川扇状地の末端に位置し、弥生時代後期から中世まで続く大集落遺跡である。この遺跡では堅穴住居が計83軒検出されており、古墳

時代に該当するものは39軒である。また、弥生時代の遺跡の多くが東側の山麓の段丘上に分布しているのに対し、古墳時代以降の遺跡は多く段丘下の農具川の近くまで分布を広げている。来見原遺跡は大町市の東部山地の山麓、居谷里湿原から流出する沢により押し出された扇状地の中腹に位置している。この遺跡も旧石器時代から中近世という長期間続いた大集落遺跡である。古墳時代では、中期の竪穴住居1軒と集石、列石、土器集中地点が検出された。土器集中地点は集石から少し離れた地点で検出された。出土土器の約半数が土師器高杯で、その他に須恵器、蓋付杯があり、集石の祭祀的な性格を有する遺構とされている(大町市教育委員会編1988)。中城原遺跡は高瀬川によって形成された社館ノ内集落北部の段丘上に広がる弥生時代中期から古墳時代にかけて営まれた遺跡である。この遺跡からは木棺墓5基、周溝墓9基、古墳4基と土壇墓4基が検出されたことから、弥生時代後期から古墳時代にかけての墓域であったことが考えられる。また、中期の竪穴住居16軒と集石も検出されていることから集落遺跡としても展開していたことが分かる(大町市教育委員会編1992)。

＜古墳＞

新郷1号墳、来見原古墳群、大笹古墳などが挙げられる。新郷1号墳は平地区新郷のほぼ北端の扇状地に位置している。この古墳は円墳で、直径30cmほどの木崎岩を積み上げて墳丘を築いた積石塚古墳である。墳丘中央に横穴式石室を設け、天井石は欠いている。副葬品は大刀、刀子、鏝、碧玉製管玉、金環、ガラス玉、須恵器、土師器などである。また、古墳の南側から須恵器の大甕や長頸壺、蓋杯などや土師器の高杯が故意的に破砕された状態で多数検出され、数回に渡って墓前祭祀が行われたことを示している。古墳の築造年代は6世紀後半で、その後2世紀に渡って追葬が行われたと考えている(大町市史編纂委員会1985編)。その他にも小熊山の東麓から東南麓にかけて後期古墳が所在している。来見原古墳群は、来見原集落の東方、山腹のテラス地形から山頂に所在し、7基の円墳が確認されている。1号墳からは刀子が出土しているが、石室や埋葬施設は確認されておらず、木棺直葬と考えられている。3号墳からは直刀が出土し、築造年代は古墳時代中期から後期初頭であるとされている(大町市教育委員会編1988)。居谷里沢左岸扇状地扇端の段丘上端、来見原遺跡範囲のやや南に大笹古墳が存在している。円墳と推定されるが内部主体は不明である。ここからは中期のものと考えられている剣が1本出土している。また、大町市に隣接する池田町にも数基の古墳が確認されている。中でも7世紀前半に築造された鬼の釜古墳は、自然石の乱積みによる無袖式の横穴式石室である(池田町教育委員会編1977)。

安曇野地域

＜集落遺跡＞

明科地域の集落遺跡には上生野遺跡・栄町遺跡、穂高地域の馬場街道遺跡・藤塚遺跡などがある。上生野遺跡と馬場街道遺跡は前期の集落遺跡である。犀川の西岸に位置する上生野遺跡は縄文時代中期から中近世まで続いた集落遺跡である。古墳時代では、前期初頭の掘立柱建物が2軒検出されている。しかし、明科地域では上生野遺跡と同じ4世紀半に遡る遺跡は発見されていない(明科町教育委員会編1995)。松本盆地に流下する烏川によって形成された広大な扇状地の最扇端付近に位置する馬場街道遺跡は中期初頭の竪穴住居2軒、後期の竪穴住居3軒が確認されており小規模であるが集落が営まれていたことがわかる。後期遺跡には藤塚遺跡と栄町遺跡がある。烏川扇状地の扇端付近に位置する藤塚遺跡は特に大規模で、竪穴住居30軒、掘立柱建物5軒が検出されている(桐原1991)。栄町遺跡では竪穴住居17件、掘立柱建物7軒が検出されている(明科町教育委員会編2002、安曇野市教育委員会編2013)。馬場街道遺跡・藤塚遺跡は穂高古墳群と同時期に存在しており、西の山麓には穂高古墳群のE・F・G群があり、ここに存在した集落も古墳造営集団の一つであったと考えられている(穂高町教育委員会編1987)。また、穂高古墳群A・B・C・D群に対応する集落遺跡は発見されていないが、川の氾濫による厚い堆積土の下に埋もれている可能性がある。

＜古墳＞

県内最古の寺院である明科座寺周辺に数基の古墳がみられるが、いずれも6世紀以降の小規模なものばかりである(明科町教育委員会編2000)。また、潮神明宮前遺跡からも8基の古墳が確認されている。遺物には勾玉、耳環、切子玉、刀の中茎、ガラス製品、直刀、刀子、鏝、須恵器などがある。1号墳は、横穴式石室を持つ円墳で

あるが、明治時代の末にはほとんどが破壊されていた。7号墳は、径20mの方墳で周溝をめくられている。8号墳は7世紀後半から8世紀初頭と考えられている(明科町教育委員会編1994・2005、桐原2002)。

松本地域

<集落遺跡>

松本市の集落遺跡は薄川、田川、奈良井川、女鳥羽川の周辺に集中的に分布する。薄川の周辺には下原遺跡・千鹿頭北遺跡がある。下原遺跡は薄川扇状地の扇尖に位置する。古墳時代後期に突然出現し、奈良時代まで続く比較的大規模な集落遺跡である。掘立柱建物12軒、竪穴住居26軒が検出されている(松本市教育委員会編1993c)。薄川右岸の千鹿頭北遺跡は前期の竪穴住居7軒、後期の竪穴住居40軒が検出されている。田川左岸には出川南遺跡・高宮遺跡・出川西遺跡がある。前期から存在する出川南遺跡では、竪穴住居、竪穴状遺構、掘立柱建物などの遺構が検出され、中でも後期の竪穴住居が125軒検出されており、大規模集落として展開していたことがわかる(松本市教育委員会編2000c・2009)。高宮遺跡は中期の短期間に営まれた遺跡で、集落内祭祀の跡と思われる土器集中区が検出されている。この遺跡からは正位に置かれた高杯、逆位に置かれたミニチュア土器、多量の玉類、石製模造品、鉄鏃や鉄剣、さらには勾玉、鏡などが出土した。また、故意に脚部を欠いた高杯なども見ついている。さらに祭祀遺構と同時期の竪穴住居が3軒検出されている。ある時期に周辺集落がこの一帯を祭域として使用した跡と考えられている(松本市教育委員会編1999)。田川右岸には生妻遺跡・向畑遺跡がある。生妻遺跡からは中期の竪穴住居が検出されている(松本市教育委員会編1991a)。向畑遺跡からは、前期の竪穴住居57軒、中期の竪穴住居2軒が検出されている(松本市教育委員会編1990b)。奈良井川周辺には梓川によって形成された扇状地に遺跡が展開し、奈良井川左岸に位置する水田地帯一帯を範囲とする三の宮遺跡・北栗遺跡・南栗遺跡がある。この地域は、遺跡や遺物の密集する新村島立条里遺構に含まれている。三の宮遺跡は新村島立条里遺構の中でも北東部に位置し、弥生時代後期から古墳時代前期の掘立柱建物を中心とした集落があったことが確認されている(松本市教育委員会編1990c)。北栗遺跡は水源近くに少数ながら竪穴住居が確認されており(松本市教育委員会編1990d)、南栗遺跡でも7世紀後半に入ると開発が開始され(長野県埋蔵文化財センター編1990)、奈良時代に入ってから北栗遺跡と南栗遺跡は本格的に集落が展開していった。女鳥羽川周辺には大村古屋敷遺跡・下出口遺跡・岡田西裏遺跡・女鳥羽川遺跡などがある。大村古屋敷遺跡では弥生時代から中世までの遺構が検出され、中期の竪穴住居が7軒確認されている(松本市教育委員会編1993c)。下出口遺跡では古墳時代から中世にかけての遺物、遺構が検出されている複合遺跡である。古墳時代では住居の発見例はないが、中期の高杯が出土している(松本市教育委員会編2008a)。下出口遺跡の南側100mの岡田西裏遺跡で竪穴住居が確認されている。中期の集落には不明な点が多かったが、その後の調査で中期の竪穴住居2軒が検出されたことから、岡田西裏遺跡から下出口遺跡の一帯に古墳時代中期の集落が存在していたことが判明した(松本市教育委員会編2006)。

<古墳>

中山古墳群・桜ヶ丘古墳・針塚古墳・妙義山古墳群などがある。中山丘陵上にある中山古墳群は73基の古墳からなる古墳群で、その中には3世紀末に築造された県内最古の前方後円墳である弘法山古墳(48号墳)も含まれる。弘法山古墳からは鏡、ガラス玉、鉄剣、鉄斧、鉄鏃、土師器などが出土している(弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編1978、松本市教育委員会編1993d)。また、4世紀前半に築造された仁能山古墳(36号墳)は径20mの円墳で、三角縁尚方鏡銘帯鏡、鉄鏃、土師器が出土している(原・小松1972)。4世紀に築造された35号墳は径30mのやや大型の円墳である。この3基は中山古墳群の中でも最初期に築造されたものである。しかし、多くは丘陵南側に位置する群集墳であり、6世紀前半から8世紀前半にかけて造営されたと推定される(桐原1980、松本教育委員会編2003c・2004・2008b)。中期の古墳の桜ヶ丘古墳は径30mの円墳である。金銅製天冠と玉類などの装身具類、刀、剣、鉾、甲冑などの武具・武器類が出土したことで有名である。天冠は、社会的地位を示すものであり、甲冑と同様に大和政権からの下賜品と考えられている(本郷村教育委員会編1966、松本市教育委員会編2003b)。針塚古墳は、薄川の右岸縁辺部に位置し、松本市の里山道に造営された積石塚古墳でその存在は早くから知られており、5世紀後半に築造されたものとされている(松本市教育委員会編1991b)。妙義山

古墳群は1号から3号までの円墳から成り、そのうち2号墳からは金環、刀、刀子、鉄鏃、馬具類、玉類、須恵器などが出土している(本郷村教育委員会編1966)。

塩尻地域

<集落遺跡>

松本盆地南東部の山麓は有数の遺跡密集地帯であるが、塩尻市内では調査された古墳時代の遺跡は少ない。主な遺跡は、平出遺跡・下境沢遺跡・中扶遺跡・竜神平遺跡・和手遺跡である。平出遺跡は奈良井川扇状地上にあり、東西1km、南北300m～400mにわたる広さ15haの集落遺跡で、竪穴住居70軒が検出された。住居の規模は全体的に大きく掘立柱建物も検出されている。また、祭祀に関連した遺物と考えられる手持勾玉、石製模造品、柄杓形土製品、土馬などが出土したことから、村のなかで頻りに祭祀が行われていた可能性がある(塩尻市教育委員会編1983b・1987b・2004・2006・2009・2010)。下境沢遺跡では竪穴住居が2軒検出されている。田川東側の田川扇状地に立地する中扶遺跡からは竪穴住居10軒が検出されている。同時に古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居が46軒検出されており、大規模な集落としてこの地域の拠点集落であったと推察される(塩尻市教育委員会編1991a)。田川を挟んで西側の奈良井川扇状地に立地する竜神平遺跡からは竪穴住居2軒、土壇3基、集石土坑1基が検出されている。そこから出土した高杯や埴などは供養形態を示しており、手捏土器も多数出土していることから、祭祀的な集落であったことが考えられる(長野県埋蔵文化財センター編1988)。和手遺跡からは古墳時代末期の竪穴住居7軒検出されている。しかし、平安時代の竪穴住居は130軒検出されていることから古墳時代には小規模であった集落が平安時代には大規模な集落となったことがわかる(塩尻市教育委員会編1997a・1997b)。

<古墳>

塩尻市域の古墳は僅少であり、北小野地区にある1基を除いて全ての古墳が田川流域に分布している。主な古墳は平出古墳群・榑ノ神古墳群が挙げられる。平出遺跡に近接する丘陵上には同時期に造営された円墳3基を有する平出古墳群がある。このうち2号墳から金環、直刀、短刀、刀子、鉄鏃、馬具、玉類、須恵器、土師器が出土している。土器型式から時期は6世紀中葉から後半と考えられる(塩尻市誌編纂委員会編1995)。田川上流域に位置する榑ノ神古墳群では3基の円墳が確認されている。築造年代は6世紀中葉から7世紀代と考えられる。1号墳からは鏡、直刀、刀子や鉄鏃、轡、鞍、鉸具、留金具などの馬具、金環、玉類、須恵器、土師器などが出土している。また、3号墳から刀子、勾玉、鏃、須恵器が検出されている(塩尻市誌編纂委員会編1995)。(曾我)

(5) 古代

文献資料からみた古代の松本平

大宝2(702)年の大宝律令の施行により全国は畿内・東海道・東山道・北陸道・山陰道・山陽道・南海道・西海道に分けられ、その下にいくつかの国が置かれた。現在の長野県にあたる地域には東山道に属する科野国が置かれていた。中央政権が政治上の目的をもって各地方にある重要性の高い古道を整備した。東山道はそのひとつである。官道は官人の交通、軍馬の派遣など重要な役割を担っており、官道には一定距離に一定数の馬を用意する駅家を設ける駅制が整備されていた。『続日本紀』によると駅家の完備した官道としての東山道が信濃に初めて通じたのは大宝2(702)年である。同7月に東山道のバイパス的役割を担っていたと考えられる吉蘇路(木曾路)も開通したとされる。これは美濃・信濃両国の境にあたる神坂峠道の迂回が困難だったことから信濃国府に直通する吉蘇路(木曾路)の交通路を開いたとされ、吉蘇路(木曾路)は信濃国府だけでなく善光寺平、越後国府に行くための道路であった。科野国には伊那・諏訪・筑摩・安曇・更級・水内・高井・植村・小県・佐久の10郡が置かれた。このうち筑摩郡と安曇郡が松本平に位置していた。『続日本紀』によれば和銅6(713)年5月に畿内七道の諸国郡郷名には縁起の良い文字である好字を用いることとなったという。これ以降、従来の「科野」にかわり「信濃」が用いられるようになったと考えられている。

また中央から信濃国に派遣された国司が政務を執っていた信濃国府そのものの位置をしめす史料・地名・伝承・遺跡は確認できないが、国分寺の存在から小県郡に置かれたというのが定説であった。しかし『日本三代実

録』の元慶3(879)年9月の条に「累坂の山岑を持って美濃と信濃の国境とした」という記事がある。そこでは「今此地、去美濃国府、行程十余日、於信濃國、最為逼近(累坂の山岑は、美濃国府(岐阜県不破郡垂井町)から十余日の遠い距離にあるが、信濃の国府からはすぐ近いところにある。)」と記されている。この累坂を現在の塩尻市奈良井と木曾郡木祖村藪原を結ぶ烏居峠とする説が有力であり、その近隣は筑摩郡である。10世紀前半に編纂された『和名類聚抄』巻5には信濃国筑摩郡の項に「国府」の割注が付されている。『和名類聚抄』は成立こそ10世紀前半であるが上記の『日本三代実録』の記事があるため、信濃国府は8世紀末から9世紀前半には小県郡から筑摩郡に移転していたと考えられている。国府が筑摩郡のどこに所在していたのかについては松本市惣社付近とする説が有力である。「惣社」は「総社」とも記し、国府にもっとも関係の深い神社の名前である。総社は国司の任務のひとつである国内の神社をすべて参拝する代わりとして国府の近くに社を設け、国内の神々を集めて祀り参拝することで任務を果たしたとするものである。平安時代後期ごろから広まったとされる惣社の地名から国府もこの付近に所在していたと考えられている。

また有数の馬の産地であった信濃には各地に牧が設けられ多くの良馬が生産された。平安時代中期に編纂された『延喜式』には信濃国内の牧として16牧が記載されており、松本平における牧として埴原牧、大野牧、猪鹿牧の記載がある。

集落遺跡

古代の松本平における集落遺跡は、大町市の来見原遺跡、安曇野市の上生野遺跡・潮神宮明宮遺跡・明科古殿屋敷遺跡・北村遺跡・吉野町館遺跡・三角原遺跡、松本市の小池遺跡・一ツ家遺跡・大村遺跡・大幡原遺跡・下原遺跡・岡田西裏遺跡・平田本郷遺跡・平瀬遺跡・下出口遺跡・出川南遺跡、塩尻市の下境沢遺跡・和手遺跡・中挾遺跡・平出遺跡・吉田川西遺跡などがある。古墳時代後期に展開した集落が奈良時代を通して平安時代に大規模化していったものが多く、僅かに弥生時代や古墳時代前期から続く集落も散見する。古墳時代後期に新たに展開し、平安時代まで続いた集落は主に安曇野地域と松本地域に集中し、平安時代から新たに展開した集落は塩尻地域に集中している。全体的に平安時代には古墳時代と比べ、倍以上の集落が展開している。

<大町地域>

奈良時代から継続して営まれた集落として来見原遺跡がある。居谷里湿原から流れる沢によって形成された扇状地の中腹に立地する来見原遺跡では奈良時代の竪穴住居1軒と平安時代の竪穴住居11軒が検出されている(大町市教育委員会編1988)。

<安曇野地域>

平安時代から新たに展開した集落として上生野遺跡・潮神宮明宮遺跡・明科遺跡群古殿屋敷・北村遺跡・吉野町館遺跡・三角原遺跡がある。松本平の北東端、犀川の右岸段丘上に立地する上生野遺跡からは平安時代の竪穴住居4軒、土壇2基が検出されている(明科町教育委員会編1995)。潮神宮明宮遺跡からは平安時代の竪穴住居1軒、土壇1基が検出されている(明科町教育委員会編2005)。明科遺跡群古殿屋敷では10世紀後半の木棺墓から八咫鏡および土師器、灰軸・緑軸陶器が集中して出土した(安曇野市教育委員会編2013)。北村遺跡からは竪穴住居や掘立柱建物、溝、井戸が検出されている(長野県埋蔵文化財センター編1993)。豊科地域に所在する吉野町館遺跡では平安時代の竪穴住居8軒が検出されており、出土土器から9世紀後半の遺跡として位置づけられている。墨書土器や緑軸陶器の出土があるが10世紀には姿を消す非常に短期間に営まれた集落である(豊科町教育委員会編1992)。黒沢川の左岸に立地している三角原遺跡からは平安時代の竪穴住居が50軒以上検出されている。9世紀中頃から約200年間にわたって生活の痕跡がみられる長期的な集落である(三郷村教育委員会編2005b、長野県埋蔵文化財センター編2005)。

<松本地域>

松本平の南東部、筑摩山地西麓の緩斜面上に立地する小池遺跡からは奈良時代から平安時代にかけての竪穴住居187軒、掘立柱建物11棟が検出されており大集落であったとされる。小池遺跡と同様に松本平の南東部、筑摩山地西麓の緩斜面上に立地する一ツ家遺跡からは竪穴住居38軒、掘立柱建物1棟が検出されている。小池遺跡・

一ツ家遺跡は8世紀初頭に集落の形成が始まり、8世紀末から9世紀初頭に長野県内最大級の掘立柱建物が出現し多量の緑釉陶器が出土することから急速に隆盛を極めたことが窺える。小池遺跡・一ツ家遺跡周辺一帯には中央政権が整備した古代官道の東山道が通っており、馬を生産していた埴原牧の推定地に近いことから小池遺跡・一ツ家遺跡は埴原牧の管理を行った集落であったと推定されている。小池遺跡はその後10世紀に衰退し、後述する塩尻市の吉田川西遺跡が牧の経営を引き継いだと考えられている(松本市教育委員会編1997a)。奈良井川扇状地と田川・牛伏川扇状地が接する沖積扇状地性堆積の末端に立地し、弥生時代から平安時代まで長期間継続した出川南遺跡からは古墳時代後期から平安時代にかけての竪穴住居96軒が検出されている(松本市教育委員会編2000c)。古墳時代後期から平安時代まで続いた集落としては大村遺跡・大輪原遺跡・下原遺跡がある。松本市街地の北東、浅間温泉の南に立地する大村遺跡からは竪穴住居73軒、松本市街地北部に立地する大輪原遺跡からは竪穴住居24軒、掘立柱建物13棟が検出されたことに加え前者からは古瓦が多く出土している。集落の東側に位置する妙義山麓の大村新切古窯跡から瓦が検出していることから集落と古窯との深い関係が考えられる(松本市教育委員会編2000b・2005a)。松本市東部の里山地区に立地する下原遺跡は7世紀後半に出現する大規模な集落で遺跡周辺が信濃国府推定地の一つである。竪穴住居9軒、掘立柱建物11棟が検出されている(松本市教育委員会編1993e)。奈良時代から継続して営まれた集落として小原遺跡・岡田西裏遺跡・平田本郷遺跡がある。松本市南部の奈良井川と田川の間広がる芳川地区に位置する小原遺跡からは竪穴住居128軒、掘立柱建物9棟が検出されている。また「又」や「餘」などの文字が書かれた墨書土器が出土している。これらの墨書土器には小原集落内では最古の建物から検出されたものもあるため、集落の開発が始められた当初から識字層の存在が認められる。また、小原遺跡は小池遺跡・一ツ家遺跡と同様に埴原牧の管理を行った集落であったと推定されている(松本市教育委員会編1990e)。松本市の北北東に位置する南向きの丘陵地に立地する岡田西裏遺跡からは竪穴住居67軒が検出されたほか工房とみられる住居の周囲から土師器焼成坑が60基検出されており、奈良時代末から平安時代前期にかけて土師器製作集団が営んだ集落跡とされている(松本市教育委員会編2006)。松本市南部の平田地区に所在し奈良井川と田川に挟まれた河岸段丘上に立地する平田本郷遺跡からは、奈良時代の竪穴住居94軒、掘立柱建物6棟、平安時代後期の竪穴住居100軒が検出されており平安時代の集落としてはかなり大規模なものである。この遺跡からは「美濃国」の刻印のある美濃須産須志器や瓦塔、鉄鉢を含む多量の鉄製品や鉄洋などが出土している(松本市教育委員会編2003a)。平安時代の集落として平瀬遺跡・下出口遺跡平瀬遺跡がある。平瀬遺跡からは平安時代の竪穴住居が76軒検出され、竪穴住居覆土中から土師器、黑色土器、灰釉陶器の杯、碗といった食器が大量に出土している。神奈川県の金沢文庫所蔵文書に養和2(1182)年に源延という僧が平瀬法住寺において『簡素要略』を書き写したという記録があることから、該期の平瀬に法住寺という寺院が存在していたことがわかっており、発掘調査も行われたが基壇などの寺院に直接関連する遺構は検出されていない。しかし三尊仏像が彫刻された石製硯や多くの布目瓦の破片が出土していることから周辺に法住寺が存在し平瀬の集落はその寺院の周りに展開する集落であったと考えられている(松本市教育委員会編2000a)。松本市街地の北側、女鳥羽川の西岸に立地する下出口遺跡からは平安時代の竪穴住居6軒、掘立柱建物2棟が検出されており、竪穴住居内に粘土貯蔵か土師器焼成坑が存在することから土師器生産集落であったと考えられている(松本市教育委員会編2008a)。

< 塩尻地域 >

松本平の最南端に位置し、本谷倉から流れ出る奈良井川によって形成された隆起扇状地上に立地する古墳時代前期から継続して営まれた平出遺跡からは平安時代の竪穴住居20軒が検出され墨書土器も出土している(塩尻市教育委員会編2009)。奈良時代から継続して営まれた集落として下境沢遺跡・和手遺跡・中横遺跡が挙げられる。境沢川と小場ヶ沢川によって形成された広範囲の複合扇状地上に立地する下境沢遺跡からは9世紀後半から10世紀前半の竪穴住居33軒が検出されている。緑釉陶器や多数の墨書土器の出土に加えカマド形土器や緑釉製耳皿などの特殊な遺物も出土している(塩尻市教育委員会編1998)。田川によって形成された河岸段丘の縁辺部に立地する和手遺跡からは奈良時代の竪穴住居1軒と平安時代の竪穴住居84軒が検出され、土師器、須志器、灰釉陶

器、緑軸陶器、青磁、白磁、火焚斗、鉄器、紡錘車などの遺物が出土している(塩尻市教育委員会編1997a)。中
狭遺跡からは平安時代の竪穴住居38軒が検出されており、下境沢遺跡と同じく当時の拠点集落であったと推察
される。米倉と思われる掘立柱建物が10棟検出されている(塩尻市教育委員会編2000)。塩尻市の最北端に立地す
る吉田川西遺跡は平安時代の竪穴住居266軒、掘立柱建物8棟が確認された古代の大規模な集落である。また「榛
原」や「蘇」と書かれた墨書土器が出土しており、「榛原」という文字の記載から前述した松本市の小原遺跡・
小池遺跡・一ツ家遺跡と同様に埴原牧の管理集落であったと考えられている。小池遺跡が10世紀に衰退し南西に
500mほど離れた吉田川西遺跡が発展を始めることから、埴原牧の経営に携わっていた有力者が9世紀代には小
池遺跡を中心に経営を行い、10世紀に吉田川西遺跡に経営の中心を移したと考えられている(松本市教育委員会
編1997a、塩尻市教育委員会編1986a、長野県埋蔵文化財センター編1989)。

牧

松本平における牧として埴原牧に比定されている松本市大字中山埴原の埴原牧と推定信濃諸牧牧監庁跡(松本
市)がある。当時の牧監庁のものとされる礎石が検出されていることから埴原牧に牧監庁が置かれていたと考え
られているがその範囲や遺構には不明点も多い(松本市教育委員会編1993a)。なおこの牧を管理していたと考え
られている集落に前述した小原遺跡・小池遺跡・一ツ家遺跡(松本市)、吉田川西遺跡(塩尻市)などがある。

古代寺院

松本平では、安曇野市の明科廃寺、松本市の大村廃寺跡などの古代寺院跡が検出されている。明科地域に所在
する明科廃寺は7世紀後半の創建と推定され、長野県内でも最古の寺院である。この時代に創建された寺院は地
方豪族の氏寺として豪族の本拠地に建立される特徴があることから、当該時期にこの地域を支配した安曇氏の氏
寺として建立された可能性が高いとされる。発掘調査の結果、掘立柱建物3棟、布掘り基礎を持つ掘立柱建物1
棟、雨落ち遺構などが検出された。中心伽藍は見えられなかったものの、瓦葺建物が検出されたことから古代寺
院跡と断定された。出土遺物として軒丸瓦、鰐尾、丸瓦、平瓦、瓦塔、土師器、須恵器、灰軸陶器、金属器等が
発見されている。瓦塔は基壇、壁体、隅付木、屋根、水煙の一部が出土し、基壇の形状から八角形の塔とみられ
ている(長野県編1983、明科町教育委員会編2000)。出土した瓦は、滋賀県大津市の衣川廃寺、岐阜県飛騨市の寿
楽寺廃寺、山梨県甲府市の天狗沢瓦窯跡から類似が出土していることが知られていたが、近年の研究で寿楽寺廃
寺から出土した軒丸瓦と明科廃寺から出土した軒丸瓦が同じ木製范型を使用し製作されたことが判明した。明科
廃寺の瓦が寿楽寺廃寺よりも先に製作されたと推定されており、当時の信濃と飛騨の人々の交流が窺い知ること
ができる(信濃毎日新聞2013)。明科廃寺付近には、下押野地区に廃寺と同時期と考えられる須恵器や土師器が出
土している上野遺跡、塩川原地区に明科廃寺の瓦類などを焼いた桜坂古窯跡など明科廃寺との関連性が指摘され
ている遺跡が所在している。出土した土師器の最も古い時期が7世紀後半のものであり、明科廃寺の瓦を焼いた
桜坂古窯跡の出土土器類も7世紀から8世紀初頭に同定されることから、創建年代は7世紀後半から8世紀初頭
にかけてと推定される(長野県編1983、明科町教育委員会編2000)。松本市街地の北東、浅間温泉の南に立地する
大村廃寺跡では寺に関わる具体的な遺構の見えには至っていないが多量の古瓦が出土していることから、近在に
大村廃寺が存在したと指摘されている。大村廃寺は明科廃寺と同様に地方豪族が建立した氏寺と推定されている
(長野県編1983、松本市教育委員会編2005a)。

窯跡群

松本平における古代窯跡群には、安曇野市の上ノ山窯跡群・菖蒲平窯跡群、松本市の田溝・山田窯跡群、塩尻
市の菖蒲沢窯跡群などがある。松本平の北東縁、北流する犀川の東に連なる山地の一角に位置する上ノ山窯跡群
からは竪穴住居25軒、須恵器窯跡17基が検出されている。上ノ山窯跡群は出土遺物から8世紀から9世紀代に位
置づけられており、同時期に展開した松本市の岡田西裏遺跡やその周辺遺跡から、廃棄されたと考えられる須恵
器不良品が多量に出土することや、蓄えられた粘土や土師器焼成坑が発見されることから窯跡群と関連した大規
模な土器づくりの集落が展開されていたと考えられている(豊科町郷土博物館編1999)。菖蒲平窯跡群からは竪穴
住居1軒、須恵器窯跡20軒、粘土貯蔵穴、土師器、黒色土器の焼成坑が検出されており、一つの窯跡からこれら

全てが検出されたことは長野県内に例がなく貴重な発見である。松本平の北西部、城山山塊の芥子坊主山に立地する田溝・山田窯跡群は松本平最大の平安時代の窯跡群である。比較的平坦な山稜の緩やかな傾斜と、浅い谷の発達という地形に加え、原材料の確保が容易であるという好条件下に形成されており甕・壺・杯・長頸瓶・蓋・高台付杯などが出土している。周辺には大村庵寺跡(松本市)があり、ただちに関係性を結び付けることは困難であるが、類似資料の出土や直線距離で約4kmの位置関係であることから大村庵寺跡の瓦の供給元である可能性が示唆されている(長野県編1983)。塩尻市の東方、南北に延びる片丘丘陵上に立地する葛蒲沢窯跡群では甕窯1基、竈穴住居1軒、葛窯1基が検出されており、須恵器の杯、杯蓋、甕、壺、長頸壺、短頸壺、鳥形甕、円面甕、瓦塔片といった遺物も出土している。甕窯は出土した須恵器から8世紀後半に構築され、極めて短期間に廃絶したと考えられている(塩尻市教育委員会編1991b)。

(6) 中世

集落遺跡

中世の集落は、古代集落のあった台地上と低地・河川沿いの各地域でほぼ継続している。古代末期から中世初期には洪水状態の時期がある反面、度々洪水も発生し初期には耕作地の維持は不安定だったと考えられる。その裏付けとして奈良井川西岸では洪水の跡をしめす含礫泥層の堆積がみられる。また塩尻市の最北端に立地する吉田川西遺跡でも地下水位の下降があり礫を含む突発的な流路も確認されている。13世紀から14世紀前半には遺構の数が増加し、分布する地域は前代を踏襲しその地域の比較的高い部分に分布していることが明らかになっている。15世紀から16世紀前半までの集落遺跡は13世紀、14世紀の遺跡と重なる傾向があるがこれらの集落は以降継続されていない(松本市編1996b)。

道路

古代からの東山道は中世も京への道として使用され続けた。奈良時代に木曾経由の道が開かれると、伊那谷経由よりも木曾谷経由の東山道が多く使用されるようになったと考えられる。中世には東山道という名称が使用されることが少なくなり吉蘇路(木曾路)の名称が鎌倉時代初期から多く使用されるようになる。また、松本城が整備される以前には善光寺街道が本町から松本城の東の元原へと通っていたと考えられることから、この道筋が木曾を上北してきた東山道であった可能性が指摘されている。鎌倉時代には信濃国府から鎌倉への道には塩尻峠から諏訪を経由する近道の甲州街道と保福寺峠から現在の上市市塩田を経由する旧東山道の二つが使用されていたと考えられるが、他地域でみられる鎌倉街道という名称がみられないため鎌倉への道は不明確である。千国街道ともよばれる仁科街道は、松本平を南北に通り越後の糸魚川へとつながる街道であり、周囲を山に囲まれた松本平に塩をはじめとする海産物を運ぶ重要な街道であった(松本市編1996b、豊科町誌編纂委員会編1995)。

(森田)

第3節 穂高古墳群の概要

穂高古墳群の名称・範囲については諸説あるが、本学では便宜上、穂高古墳群を以下のように定義・分類づけている(國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

1. 「穂高古墳群」は『信濃史料』(信濃史料刊行会編1956)において分類されたA群～D群、『国鉄緑化線等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』(長野県教育委員会編1969)において分類されたE群～G群、『穂高町の古墳』(穂高町教育委員会編1970)において分類されたH群、『長野県史』(河西・松尾1984)において旧穂高町地域に分布する古墳群を構成する一部とされた松川村所在古墳によって構成される。
2. 従来古墳群全体を示す名称として多く用いられてきた「有明古墳群」という語については、A群～D群までを指す場合と旧穂高町の古墳全体を示す場合の2通りの意味をもち、なおかつ松川村所在古墳を含める場合と含まない場合があることから、これを用いず「穂高古墳群」の名称に統一する。
3. 単独墳については現在までの研究史上の習慣やG1号墳(上原古墳)のように未知の古墳が周辺に存在して

いる(していた)可能性(徳高町教育委員会編2001a)を考慮して古墳1基のみで構成されていても「群」とする。

4. A群～G群は徳高古墳群を構成するそれぞれ独立した支群とし、古墳群全体を示す「徳高古墳群」と各支群との間で習慣上・便宜上用いられてきた「有明古墳群」「西徳高(牧・塚原)古墳群」などの名称は用いない。
5. 各支群を構成する古墳の総数は「信濃史料」以降「所属支群を示すアルファベット＋通し番号」の表し方で文献上に確認できたものを総数として報告した。また徳高古墳群全体を構成する古墳の総数は各支群の総数の合計に加え、「所属支群を示すアルファベット＋通し番号」の表し方で文献上では確認できないが以前に文献上で存在が確認されているもの(例：孤塚4・5号古墳)を考慮して「87基以上」とする。

以下、上述の諸文献や各報告書をもとに支群ごとに概要をまとめておく。

A 群

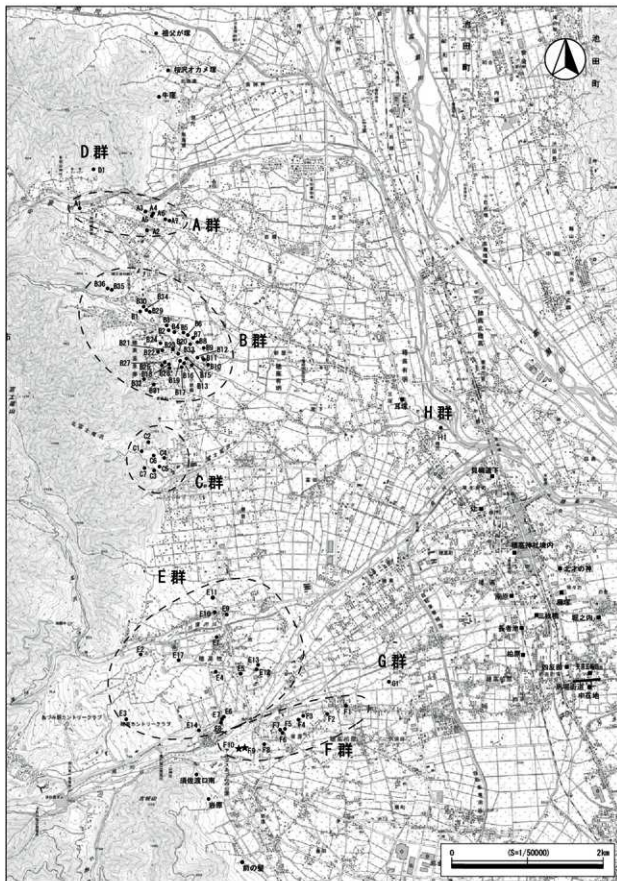
宮城地区にあり、油川左岸に沿って存在している一群である。8基のうち4基が現存しており、1964年の徳高町教育委員会による発掘調査では、本群中には8基が存在していたとして埋滅し去った4基を欠番にしている。そのうち最も高い場所にあるのはA1号墳で、残りの3基は800mから1100mほど下った場所にある。A1号墳は陵塚ともいい、墳丘・石室ともに原形に近い形で残っている。横穴式石室で、石室様式は両袖式である。天井石には11枚の花崗岩がのっており、側壁・奥壁は自然石で囲まれている。徳高古墳群中最もよく保存されているものの1つである。1982年に筑波大学によって墳丘石室実測調査が行われた(岩崎・松尾・松村1983)。副葬品としては、直刀、馬具、土師器、須恵器(提瓶・甕・埴・杯)が出土したといわれているが、現存していない(桐原1991)。A6号墳は犬養塚ともいい、本群中では東端に近い場所にあり、また規模も大きなものである。墳丘は上部がなく、周囲だけがわずかに残っている。石室は自然石で囲まれ、北壁・南壁の一部と奥壁が崩れかけたまま残っており、天井石はない。装身具(勾玉・管玉・ガラス小玉・切子玉・金環)、馬具(雲珠・香葉・轡・鍔・尾錠)、武器(直刀・弾・鉄鏃)、須恵器(横瓶・平瓶・蓋付杯・杯)と多量の副葬品が出土しており(第7図1)、これら是有明山神社社宝となっている。1982年に筑波大学が遺物実測調査を行った(岩崎・松尾・松村1983)。A7号墳は黒塚ともいい、本群中最東端にある。墳丘は周囲のみわずかに残っているが、天井石はない。石室は奥壁のみほぼ完全に残っており、東西の側壁は下部のみが残っている(徳高町教育委員会編1970)。A8号墳は、現在墳丘はなく内部主体も不明である。馬具(尾錠)、土師器、須恵器(提瓶・甕・甕・高杯)、装身具(金環・水晶切子玉)が出土している。

B 群

天満沢川の両岸に沿って36基が存在している。B1号墳はぢいが塚ともいい、本群中では最大の規模を有しており、横穴式石室の規模も大きい。墳丘は半壊し、天井板が5枚残っている。右壁に大きな自然石を利用しているのが特徴である。石室内部はほぼ完全に残っている。副葬品は不明である。1982年に筑波大学によって墳丘石室実測調査が行われた(岩崎・松尾・松村1983)。B3号墳は連塚ともいい、墳丘は半壊の状態にあるものの、石室はほぼ完全に残っている(桐原1991)。B5号墳は金塚ともいい、現在は東壁のみが残っている。墳丘はわずかに残っており、石室は露呈している。1918年に南安曇教育会によって発掘調査が行われた(太田1923)。人骨3体が出土しており、他に武器(直刀・鉄鏃)、装身具(勾玉・管玉・小玉・金環)、馬具(轡・尾錠)、須恵器(長頸瓶・埴瓶)、茶碗と多数の遺物が出土している(第7図2)。B13号墳の墳丘規模は大きくないが、墳丘・石室ともに完全な状態で残っている。B23号墳は祝塚ともいい、墳丘は半壊している。石室はわずかに残っているが、土が流入しており詳細不明である。1921年の県報告によると祝塚のある地籍には他に7基の古墳があり、うち2基が1886年に発掘され、須恵器(壺・埴瓶・高杯)、土師器(甕・杯)、装身具(管玉・勾玉・切子玉・金環)、直刀・馬具、金鍍金菱形留金具が出土しており、これら是有明山神社で保管されている。1982年に筑波大学が出土遺物実測調査を行った(岩崎・松尾・松村1983)。

C 群

富士尾沢の山麓をやや入った沢の上流付近の両岸に7基存在する。大型石室をもつ古墳はなく、小・中型の古墳で構成される小群で、石室はすべて横穴式である(岩崎・松尾・松村1983)。



第6図 穂高古墳群と周辺の古墳時代遺跡

安曇野市教育委員会2010をもとに作成。A 2・A 4・A 5の位置は藤沢1963による。B14・B26・E15・E16・E18・E19の位置は不詳。なお、高瀬川を挟んだ対岸の池田町にも数基の円墳が存在するが、本図には示していない。

D 群

中房川左岸にある通称「^{ましのいわや}魏石鬼窟」1基のみで成り立っている。他の古墳群とは異なる無墳丘古墳で、巨岩の下に石室を構えている。石室は横穴式石室で、巨大な花崗岩の一枚岩を天井石とし板石と角礫を使用して側壁と奥壁が構築されている。この独特な構造に対し、1921年に調査した鳥居龍藏氏によって、「ドルメン式古墳」の名称が考えられた(鳥居1925)。全国的にも珍しい形式ではあるが、石室規模や副葬品などにおいて徳高古墳群の他の古墳との違いはみられない(三木・寺島・西山1987)。鳥居氏の踏査以後もたびたび調査が行われ、1922年に宮坂光次氏による実測調査(宮坂1922)、1986年に三木弘氏による発掘調査が行われた(三木・寺島・西山1987)。また三木氏は2006年に魏石鬼窟について再考し、古墳群の再検討を行っている(三木2006)。副葬品としては、馬具(鉄地金銅張り飾金具・留金具破片・半球形飾金具・金具破片)、鉄鎌、須恵器破片(罎・フラスコ形提瓶・高杯)が出土している(第7図3)。古墳の年代については馬具・金環・須恵器が出土していることから古墳時代後期であることは確実である。また出土遺物から金銅張り飾金具は6世紀中葉～7世紀前半にかけての年代のもの、須恵器は6世紀中葉～7世紀後葉にかけての年代のものであることが判明している。加えて、板石を立てて側壁の大部分を構成し石室の上半分の隙間を角礫で埋めていくという石室構造の特徴も考慮して古墳の年代を考えると、同じ構成の長野県内の他の古墳との比較や先に述べた出土遺物の年代から、古墳の年代が6世紀後葉まで遡る可能性はあるものの、7世紀前半に位置付けることができる(三木・寺島・西山1987、桐原1991)。また天井石正面には3体の観音像が彫刻され、玄室内床面には火が使用された痕跡があり天井も焼けていることから、この場所が後世に修験の場所として使用されていたことがわかっている(三木1990)。

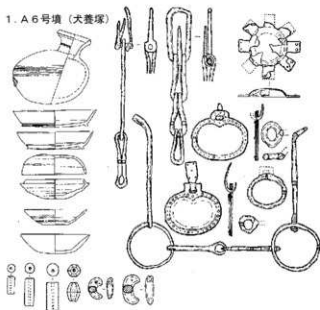
E 群

鳥川と川窪沢川の間にある台地の東縁に集中して存在している。E1号墳は西牧塚ともいい、墳丘がわずかに残っており石室を構築する大石の一部が露出している。墳丘上に祠がある。E2号墳は三郎塚ともいい、墳丘がわずかに残っており石室が露呈している。石室のうち、長方形の玄室が確認できる。土師器、須恵器が出土している。E3号墳は十三層敷西古墳ともいい、台地の中央にある。ここは本群中の中では標高が最も高い場所である。現在は徳高カントリークラブ内に保存されている(桐原1991)。墳丘は明確ではないが石室が露呈しており、石室様式は無袖式である。遺物は出土していない。E6号墳は狐塚3号墳ともいい、本群中最大規模である。副葬品として武器(直刀・鐔・槍身・鉄鎌)、馬具(轡)、装身具(勾玉・管玉・切子玉・白玉・金環・青銅製円形銅)、須恵器(長頸瓶・平瓶・横瓶・高杯・蓋)が出土しており(第7図4)、これらは現在東京国立博物館・徳高神社・満願寺などに保管されている(桐原1991)。三木弘氏は狐塚3号墳の副葬品をまとめ、それらの位置づけを通じて有明古墳群の形成過程の一端を明らかにした(三木1991)。E7号墳は狐塚2号墳ともいい、武器(刀子・直刀・鐔・鉄鎌)、装身具(金環)が出土している。E10号墳は寺島塚ともいい、墳丘がわずかに残っている。1951年に大場警雄氏によって発掘調査が行われた(藤沢1968)。直刀や勾玉などが出土している。古墳の前には寺島仲間の祝殿が祀られている(桐原1991)。E12号墳は浜塚塚1号古墳ともいい、水田中にある。管玉・切子玉が出土している。E17号墳はショウシハウ殿古墳ともいい、台地上縁の最西端にある。石室は全く残っていないが、直刀が出土している。人骨が発見されたという話もある(桐原1991)。

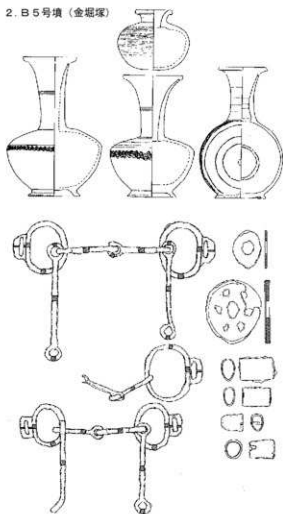
F 群

塚原地区の柏原沢の右岸の標高605mから650mの間に列在している。本群はほとんどが破壊されており詳細を知ることはできないが、1921(大正10)年の調査により10基のみ墳丘の規模が判明していて、それによると大小5基ずつ二つのグループに分けられる(桐原1991)。F1号墳は一本杉古墳ともいい、横穴式石室で石室様式は無袖式である。1975年に徳高町教育委員会によって発掘調査が行われた(中島1976)。床面中央部から小豆大の骨片が多数検出された(桐原1991)。須恵器の高台付杯の破片1点が出土している。F2号墳は一本杉古墳より西に15mほど離れたところであり、近世に破壊されている。墳丘上には大型の石が4点あり、これらは天井石として使用されていたと思われる。馬具などが掘り出されたが、祟りを恐れてまた埋め戻したという伝承がある(桐原1991)。F8号墳は現在では古墳の存在はわからないが、土地の人々は古墳跡と伝えている(桐原1991)。須恵器

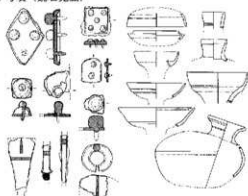
1. A 6号墳 (犬養塚)



2. B 5号墳 (金堀塚)



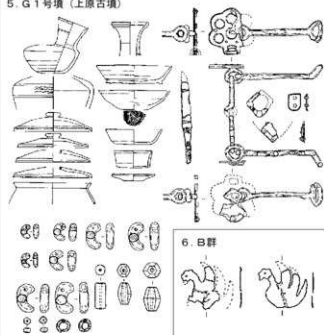
3. D 1号墳 (鏡石鬼窟)



4. E 6号墳 (狐塚3号墳)



5. G 1号墳 (上原古墳)



須恵器：S=1/8、玉類・冠飾：S=1/4 武器・馬具：S=1/6

第7図 穂高古墳群出土の主要遺物 (桐原1991)

第2表 穂高古墳群一覧表

古墳名 (古墳)	外郭施設			内郭施設			出土遺物	備考			
	種類	幅(m)	高(m)	形式	開口方位	幅(m)			幅(m)	高(m)	
A 1号墳(被塚)	円	(口径) 約14	2.1	横穴式	S70° E	8.14	(横径) 8	(横径) 22	須恵器・土師器・馬具・鹿刀	円形土壇 墳丘・石室は存在否	
A 2号墳	円			横穴式	S20° E	4					
A 3号墳	円	7(推)		横穴式	S	4	1		須恵器	墳丘・櫛石が僅かに残る	
A 4号墳	円	(径) 10.8 (覆石) 7.4	1.2							大正10年時点で破壊	
A 5号墳	円	(径) 6.6	0.6							大正年代には墳丘消滅	
A 6号墳(犬養塚)	円	(口径) 約11	2.7	横穴式	S30° W	7.2	1.4	(横径) 11	須恵器・馬具・直刀・鐔・鉄槌・勾玉・管玉・ガラス小玉・切子玉・金環	持ち盛り 墳丘の周囲・北壁・南壁の一部・櫛石が残る	
A 7号墳(組塚)	円	10~15	1.2	横穴式	S20° W	8.3	1.5	1.1		持ち盛り 墳丘の周囲・東壁・側壁の一部が残る	
A 8号墳	円								須恵器・土師器・馬具・切子玉・金環	墳丘消滅・石室不明	
B 1号墳(石いぶ塚)	円	(径) 約30	(径) 約3.3 (高) 3.8	横穴式	S60° W	8.78	2.26	1.94		石室内部ほぼ消失	
B 2号墳	円	10	2.1							石室は側壁の一部を残して崩壊	
B 3号墳(被塚)	円	15	2.5	横穴式	S22° E	6.4	1.7	0.9		墳丘半壊・石室はほぼ消失	
B 4号墳	円	15.3	2.7	横穴式	S12° E	10.2	1.7	2.3		石室が崩壊	
B 5号墳(金堀塚)	円	(径) 約15	約1.2	横穴式	S	6	8.6	1.6	1.5	須恵器・馬具・直刀・鐔・鉄槌・勾玉・管玉・小玉・金環・人骨・土師	東壁のみ残る
B 6号墳	円	12.5	0.8	横穴式	S20° E	7.55	1.2~1.4	0.8		墳丘ほぼ崩壊	
B 7号墳	円	8.4	0.8	横穴式	S30° E	5.90(推)	1.4(推)	0.8		墳丘はほぼ消滅・石室が崩壊し北壁の一部のみ僅かに残る	
B 8号墳	円	8.3	0.8	横穴式	S30° E	5.1	1.4	0.8		墳丘・側壁が僅かに残る	
B 9号墳	円	9.62	0.9	横穴式	S30° E	5.95	(横径) 約3	0.9		持ち盛り 墳丘半壊	
B 10号墳	円	(径) 約14.8	1.8	横穴式	S10° E	9	2.4	1.45		持ち盛り 墳丘半壊	
B 11号墳	円			横穴式	S20° E	9	1.5	0.4		墳丘は僅かに残る・石室は崩壊し石が散在	
B 12号墳	円	8(推)	1.3(推)	横穴式	S10° E					北壁の一部が残る	
B 13号墳	円	12	1.7	横穴式	S10° E	8.5	(横径) 約3	1.2		持ち盛り 墳丘・石室は存在	
B 14号墳	円	11	1.5	横穴式		7.6	1.8	0.8			
B 15号墳	円			横穴式	S30° E	7	1.5			墳丘・石室壁に残る	
B 16号墳	円	11	1.53	横穴式	S40° E	7.5	1.3	1		墳丘半壊	
B 17号墳	円			横穴式		5.5	1.5			破壊され崩壊の石が散在	
B 18号墳	円									消滅	
B 19号墳	円			横穴式		5	1.5			半壊・側壁の石が散在	
B 20号墳	円			横穴式		4				墳丘のみ残る	
B 21号墳	円									消滅	
B 22号墳	円									消滅	
B 23号墳(祝塚)	円	13.8	1.8	横穴式	S30° E	4	1.8		須恵器・土師器・馬具・菱形銅貨・直刀・勾玉・管玉・切子玉・金環	墳丘半壊・石室は僅かに残る	
B 24号墳	円	14	1	横穴式		5.5				櫛石のみ残る	
B 25号墳	円	6.5	1.5	横穴式	S35° E	6.5	1.5			墳丘・石室半壊	
B 26号墳	円	8.5	1.5								
B 27号墳	円			横穴式		7	2	0.2		石室半壊	
B 28号墳	円			横穴式	S10° E	4.8				石室半壊	
B 29号墳	円	14.3	1.3	横穴式	S25° E	8.5	1.5			墳丘・石室壁に残る	
B 30号墳	円			横穴式	S37° E	4.5	1.25			石室が崩壊・櫛石が残る	
B 31号墳	円			横穴式	S50° E	6	1.1	0.6		側壁の大部分が崩壊	
B 32号墳	円			横穴式		6	1.5			遺跡・遺石4枚が残る	
B 33号墳	円	10		横穴式		5.5				北壁の一部のみ残る	
B 34号墳	円	10		横穴式		5	(横径) 約3 (中径) 1.2	1.2		北壁と東壁が残る	
B 35号墳	円										
B 36号墳	円										
B 37号墳	円										
C 1号墳	円	(径) 約18.5 約11.7	2	横穴式	S10° E	7.2	1.45	1.1		側壁が僅かに残る	
C 2号墳	円	11	1.3	横穴式	S30° E	6	1.2	1.3		側壁が残る・天井石が周囲に散乱	
C 3号墳	円	10.5	1.5	横穴式	S25° E	7	(横径) 約3 (人) 約3			崩壊している	
C 4号墳	円	(径) 約4.2 (覆石) 約4	1.43	横穴式	S20° E	3.3	1.5			墳丘が残る	
C 5号墳	円			横穴式		5.3	1.6			側壁の一部のみ残る	
C 6号墳	円										
C 7号墳	円										
D 1号墳(礫石塚)	圓墳	丘		横穴式	S20° E	(径) 約3.36 (高)	(横径) 約3.7	(石径) 約5.5 (石径) 約5.4	須恵器・馬具・耳環・岩片遺物		
E 1号墳(西牧塚)	円	12	0.6							墳丘が僅かに残る・石室が一部崩壊	
E 2号墳(三郎塚)	円	14	1.4	横穴式	S20° E	2	1.3	1.2	須恵器・土師器	墳丘が僅かに残る・石室が崩壊	
E 3号墳 (十三層堂西古墳)	円			横穴式	S50° E	5	1.3			無地式 墳丘が僅かに残る・石室が崩壊	
E 4号墳(東塚)	円	10	1.3							墳丘が崩壊されている	
E 5号墳(上人塚)	円	12	2.3							墳丘が僅かに残る	
E 6号墳 飯塚3号墳	円	(径) 約9.8 約11.6	3.6						須恵器・馬具・直刀・鐔・槍身・鉄槌・ 銅・勾玉・管玉・切子玉・白玉・金環	墳丘が僅かに残る	
E 7号墳 飯塚2号墳	円	15	2	横穴式	S15° E	5	2.1	1		直刀・鐔・刀子・鉄槌・金環	墳丘が僅かに残る・石が散在
E 8号墳 飯塚1号墳	円	15	3							石室詳細不明	
E 9号墳(前田塚)	円	5	1							墳丘が僅かに残る	
E 10号墳(寺島塚)	円	8.5	1.5							直刀・勾玉	
E 10号墳(神倉塚)	円									墳丘・石室は確認されていない	

E12号墳 (高塚塚1号古墳)	円																		碧玉・切子玉		
E13号墳 (高塚塚2号古墳)	円	10(棟)																			
E14号墳 (瀬山1号古墳)	円	10	1																	石が数個存在	
E15号墳 (瀬山2号古墳)	円	10																		詳細不明	
E16号墳(総塚)	円																				
E17号墳 (ジョウシハク古墳)	円	6.3	0.6																	直刀・人骨 石室は全く残っていない	
E18号墳 (瀬山3号古墳)																				詳細不明	
E19号墳																					
F1号墳	円	4	0.5	横穴式				4.4	(集)1 (中)1 (傍)1以上	1.25										須恵器・骨片 舞袖式 原形不明	
F2号墳	円	3	1	横穴式	S10° W																江戸時代に破壊
F3号墳	円	9.75	1.5	横穴式	S13° E																江戸時代に破壊・石が多数存在
F4号墳	円	(東西)石 (南北)5.5	2(棟)	横穴式	S20° E																石室不明
F5号墳	円	10	1.6	横穴式	S40° E	(集)5.5	1.4														東壁が壊かに残る
F6号墳	円	10	1	横穴式	S8° E	5.95	1.5	1.15													石室の古側に元宮塚田大明神の石碑と石の基礎がある
F7号墳	円	9		横穴式	S10° E	4	1.4														
F8号墳	円																				須恵器破片 古墳域と伝えられている
F9号墳(二つ塚)	円	17	1.3	横穴式	S12° E																須恵器・土師器・馬具・刀子・切子玉・ 金環片・硬質・陶製受皿・骨
F10号墳(二つ塚)	円	13	1.8	横穴式	S10° E	3.2	1.1														割壁の心組みが確認できる 墳丘は崩壊され、平地下式の石室のみ残る
G1号墳(上原古墳)	円			横穴式				10.1	1.25~ 1.4	1.6											須恵器・馬具・直刀・刀子・切子玉・碧玉・ ガラス小玉・切子玉・金環
H1号墳(耳塚)	円	15.5	2																		墳丘に礎が認められている
縄文が塚古墳	円	16	2.53	横穴式	S11° W	8.14		(中)2.4 (傍)1.5	1.85												両式式 石室はほぼ完全
牛窪古墳	円			横穴式																	墳丘半壊
松原大塚古墳	円																				

本表は以下の文献をもとに作成した。

2岡・松尾・松村1983、春日1921、朝岡1991、徳高町・徳高町教育委員会編1989、徳高町教育委員会編1970、三木2006、安曇野市教育委員会編2010

破片が採集されている。F9号墳・F10号墳はあわせて二つ塚ともいう。F9号墳は墳丘上に巨石が散在し、諏訪社の古い祠があったが現在はなくなっている。F10号墳は墳丘の残りがよく、石室も天井石6石と側壁4段積みをはっきりと確認できる。本群中最もよく保存されている古墳である(徳高町教育委員会編1970、國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

G 群

F群の東側の上原地区にあり、現存では上原古墳1基のみが確認されている。墳丘の痕跡はないがかつては盛土になっていたと考えられ、側壁・奥壁が残っている。石室は竪穴式である。1930年に猿田文紀氏によって発掘調査が行われた。猿田文紀氏によれば、もとは横穴式石櫛で円墳であったと考えられる(猿田1931・1933)。その後、1932年に今井眞樹氏による踏査(今井1933)、1982年に筑波大学による墳丘・石室実測調査が行われた(岩崎・松尾・松村1983)。付近に「塚田」の小学名があること、大石が掘り出された記録があることから、今後新たな古墳が発見されると予想される。上原古墳は水田中にあり、墳丘の痕跡はないが以前は盛土になっていたと思われ、側壁・奥壁が残っている。装身具(勾玉・管玉・切子玉・ガラス小玉・金環)、武器(刀子・直刀)、馬具(轡・杏葉)、須恵器が出土している(第7図5)。杏葉が心葉形をとることで轡が六花形鏡板付であることなどから、6世紀後半までに作られたものと考えられている(桐原1991)。

H 群

H1号墳は耳塚といい、本群はこの1基のみが確認されている。徳高川の西に臨む最低位段丘の先端に築かれている。墳頂に祠が祀られており、大塚様といひ昔から耳の神様として地域で知られていた。『旧郡誌』では磯石鬼八面大王にまつわる塚と伝えられているとの記載がある。一方、『新郡誌』では盛土であることは確かだが、古墳であるかは詳細不明としている。1986年に徳高町教育委員会によって墳丘測量調査が行われた。

松川村所在古墳

安曇野市の北側、松川村には祖父が塚古墳・牛窪古墳・桜沢オカメ塚古墳の3基の単独墳が確認されており、他に数基が存在していた可能性がある。祖父が塚古墳は芦間川右岸にあり、内部主体がほぼ完全に残っている。1982年に筑波大学によって石室実測調査が行われた。内部主体は横穴式石室で、石室様式は両袖式である。副葬

品としては玉・鉾・刀・鏡・土師器などの出土が伝えられているが(岩崎・松尾・松村1983)、現存しているものは宮内庁書陵部に保管されている玉・銀環・頭椎太刀の装身具一式のみである(河西・松尾1984)。牛窪古墳・桜沢オカメ塚古墳については1921(大正10)年の『信濃教育』に当時大町中学校校長であった春日賢一氏の報告が掲載されている。『信濃教育』によると、牛窪古墳は春日氏が報告した当時にはすでに開口されており、墳丘も半壊状態であったという(春日1921)。

(参考)旧堀金村所在古墳

これまで穂高古墳群を構成する古墳として認定されていないが、旧堀金村内にある須砂渡口南古墳・岩原古墳・前の髪古墳はF群に近い位置関係にあることが確認されており(安曇野市教育委員会編2010)、穂高古墳群に所属する古墳である可能性がある。

(参考)有明古墳群出土一括品

有明古墳群出土とされる遺物が宮内庁書陵部に保管されている(岩崎・松尾・松村1983)。内容は武器(直刀・刀子・鉄鏃・倒卵形鏃・金銅柄金具)、馬具(轡・鈴)、装身具(金環・勾玉・切子玉・管玉・白玉)、須恵器(高杯・平瓶・壺・杯蓋・横瓶・提瓶)などで、典型的な後期古墳副葬品である。倒卵形鏃や金銅柄金具などの中に優品があることや、出土遺物の中に含まれている鳳凰形銅葉(第7図6)が1988年に奈良県藤ノ木古墳で出土した金銅製冠に表現されている鳥形の装飾に酷似している(穂高町・穂高町教育委員会編1989)ことは注意されるべき点である。

(渡邊)

第IV章 穂高古墳群F9号墳の調査

第1節 調査地の概要

調査対象地である穂高古墳群F9号墳は、安曇野市穂高柏原3653、北緯36°19'08"、東経137°51'29"に位置している。烏川扇状地の扇央、F群の最西端に築かれた古墳で、F10号墳とともに「二つ塚」と呼ばれている。標高660m付近とF群中最も標高が高い。1970年代までは、墳頂部に「諏訪社」と呼ばれる小祠が建てられていたが(穂高町教育委員会1970)、現在では、径約5cm程の穴の開いた鳥居の礎石と思われる石が残るのみである。現在この一帯は国営アルプスあづみの公園の敷地となっているが、1995年の公園建設以前はF9号墳とF10号墳の間に旧塚原配水池が存在した(第8図)。従って、F9号墳西側の墳端は、配水池の施設によって破壊されている可能性が高い。この公園の建設に伴い、1996年にF9号墳・F10号墳付近の試掘調査が行われ、集積遺構が確認された。両古墳は公園の修景の一部として現状保存されることになった(長野県埋蔵文化財センター編1997)。(池田・鈴木)



第8図 F9号墳と旧塚原配水池 1/2,000
(長野県埋蔵文化財センター編1997を改変)

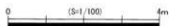
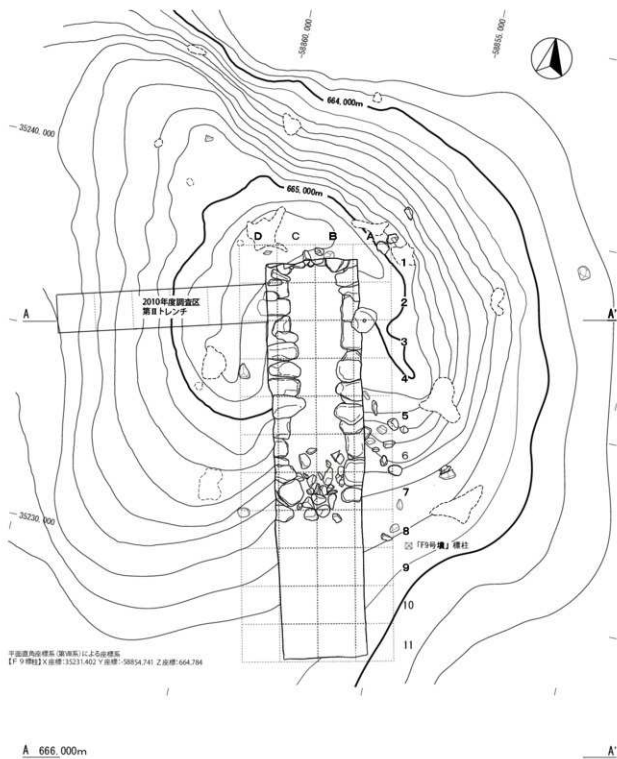
第2節 調査の経過

(1) 2011年度までの調査成果

調査初年度である2009年度調査では、F9号墳・10号墳の墳丘測量と墳丘及び石室の現状を確認した。その結果、F9号墳は現状で直径約17.0m・残存高約1.3m以上、F10号墳は直径約12.9m・残存高約1.8mの横穴式石室を持つ円墳と判明した(國學院大學文学部考古学研究室編2010)。

2010年度の調査では、比較的保存状態の良いF10号墳を現状のまま保存し、F9号墳の発掘調査を実施した。この調査では、F9号墳の墳丘上に1m×1mの格子状のグリッドを設定した。調査区は、石室の範囲や羨道の位置の確認を目的とした南北に伸びる第Iトレンチと、墳丘の堆積状況や墳頂部の状況を把握することを目的とした東西に伸びる第IIトレンチを設定した。調査の結果、第Iトレンチでは石室東壁と想定される石列を確認した。しかし、原位置を留めた天井石は残存しておらず、石室内は10cm～50cm大を中心とする大型礫で埋められていた。石室の入り口付近の攪乱層を中心に須恵器や土師器が、石室付近からは和釘や硬貨等の金属類、近代陶器片などが出土した。このうち、須恵器の長頸瓶は7世紀中葉に属するものである。一方、第IIトレンチは、配水池の建設に伴い墳端が大きく崩された痕跡が認められた(國學院大學文学部考古学研究室編2011)。このため、2009年度測量で得られた墳丘の規模は構築当初から大きく異なる可能性が高い。

2011年度の調査では、石室の全体像を確認するため、第Iトレンチを北に1.5m、西に1m拡張した。調査の結果、石室残存長約7.0m、石室幅約1.3m～1.5mの無袖式横穴式石室であることが判明した。この時点での石室残存高は、最大約1.1mであった。石室の主軸は、2010年度の調査でN-14.5°-Wと報告していたが、2011年度の調査でN-12°-Wをとる南の方向に開口した石室であることが明らかになった(第9図)。石室中の大型礫をおおむね除去した時点で調査を終了した。また、古墳時代から古代にかけての遺物としては須恵器・土師器・切子玉が出土し、中世以降と見られる遺物には灯明皿の受け皿・釘類・硬貨等がある。なかでも、須恵器の杯は8世紀前後、子持壺は7世紀中頃の遺物と考えている(國學院大學文学部考古学研究室編2012)。



第9図 2010年度～2012年度調査区全体図

(2) グリッドの再設定

2011年度の調査では、2010年度調査で設定されていたグリッドを使用していたため、グリッドの軸が石室に対して傾いていた。そこで、2012年度は、改めてグリッドの設定を行うこととした。まず、2011年度の調査で明らかになった主軸の延長上に基準点を設けた。その基準点から、東方向に2m、西方向に2m、南方向に11mの1m×1mのグリッドを設定した。各グリッドには、北から南に1～11、東から西へA・B・C・Dの記号を割り振った。結果、グリッド軸の角度が2011年度より、西に約2.7°移動した。また、グリッド全体は北に約46.0cm移動するかたちとなった。

(3) 2012年度の調査経過

今年度の調査では、内部構造を明らかにするため昨年度の第1トレンチの石室埋土を更に掘り下げることにした。調査に先立ち、墳丘とトレンチの現状写真を撮影し、昨年度までのベンチマークを基に主軸を定め、グリッドを設定した。出土した遺物は、原則として写真撮影の後に取り上げを行い、光波測距儀を用いて出土地点の測定を行った。掘削した土は、グリッドごとに分けて篩にかけた。調査の6日目にC1グリッドの石室内に転落していた大型礫を取り除いたところ、掘り下げていた面からさらに約10cm深い標高約663.6m地点から、明褐色のしまりのある層が現れた。この面は、石室の床面である可能性が高く、これ以上の調査は次年度にまわすことにして、今年度の掘り下げを終えた。その後、石室内を清掃し、トレンチの全景と石室の全景・底面・側壁の写真撮影を行った。また、石室奥壁・東壁・西壁の平面図と立面図を縮尺1/10で作成した(第10図)。1グリッド～6グリッドの側面は大きな石材が多く水系を張ることが困難であったため、標高664.5mを基準に、チョークで目安を押し、実測した。7グリッド～10グリッドについては、標高664.45mに水系を張った。また、8～11グリッドの両側面について、去年に引き続き土層の堆積状況を確認し、土層断面図を作成した(第12図)。縮尺は、石室と同様に1/10とした。(鈴木)

第3節 石室・調査区土層

(1) 石室

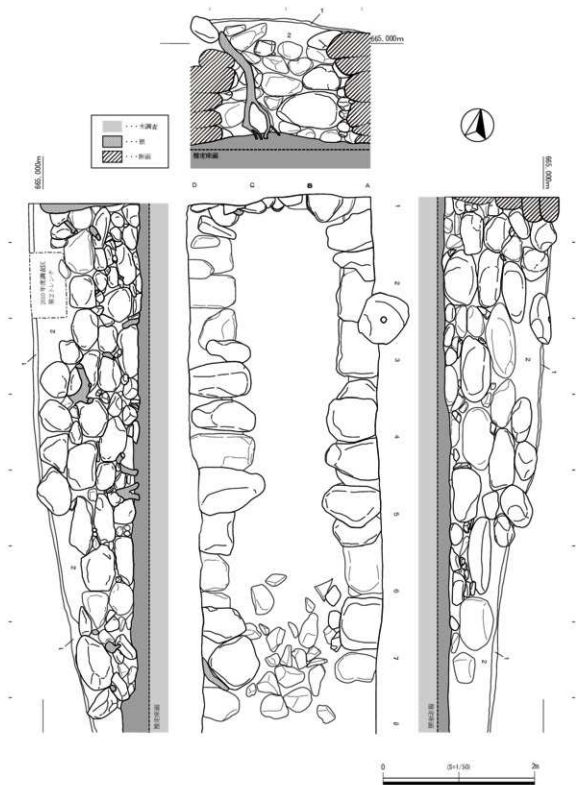
石室は、主軸をN-12°-Wにとり、南向きに開口する無袖式横穴式石室である。石室の規模は、現状で残存長約7.0m、幅約1.3m～1.5m、高さ約1.5m以上であることが明らかになった。これまでに石積みは東壁4段、西壁4段、奥壁6段までが確認されている(第10図)。

側壁の最上段は丸みをもった石材の小口積み、最上段以下は四角や横長の石材による平積みである。また、両側壁の石積みは上段になるにつれて石室幅が狭くなっており、持ち送りと呼ばれる技法が用いられている。石材の大きさは平均で幅60cm、厚さ40cm程度である。また、下段になるにつれて大きな石材の間に直径10cm～20cmほどの小ぶりの石を詰め込んでいる箇所が多くなることが確認できる。石材の種類は、数点の砂岩系堆積岩を除き、全て花崗岩である。

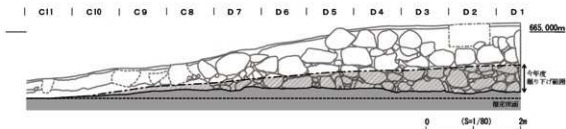
奥壁では、大きさが揃わない石材が乱雑に積まれている。石材は、大きなもので幅80cm、厚さ50cm、小さなもので幅20cm、厚さ15cmと様々である。奥壁と側壁の境は、石材が斜めに配置され、隅丸状を呈していた。このうち奥壁と西壁の境では、平均的な大きさの石材が用いられている。一方、東壁との境では上から4段目以降から直径約15cm前後の小さな石材を使用している。B7・C7グリッドを中心とした地点では、不規則に散布する直径約30cm前後の石材を検出した。これらが閉塞石であったとするならば、7グリッド付近が羨道周辺にあたるものと推測できる。

石室床面と思われる層は、C1グリッドから検出した。明褐色で、非常に微細な砂粒で構成される層である。粘性に欠け、硬くしまった部分が確認できる。

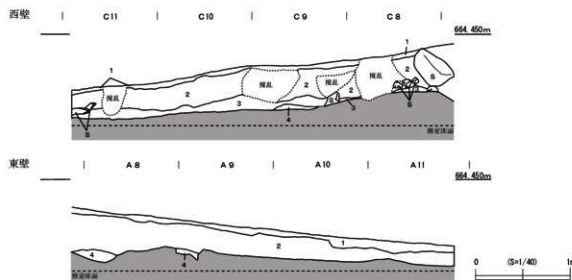
穂高古墳群の石室に関して、三木弘氏が考察を試みている。三木氏は各支群に共通して墳丘規模の点で「1基



第10図 F9号墳石室実測図

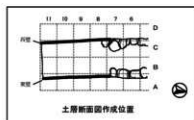


第11図 今年度掘り下げ範囲



土層説明

- 1層：黒色土(0/2/1) (2011年度の1層に対応)
調査区全体に見られる表土で、腐葉土層である。場所により構成物や色調に若干の相違がある。
- 2層：黒褐色土(0/0/2) (2011年度のII層に対応)
5m以上の大きさの礫が多量に混ざる。礫は最大25cm程度の大きさである。
砂粒の大きさには統一性はみられず、非常に微細なものから30cm前後の礫までが混在している。
- 3層：黒色土(0/0/1, 7/1)
径5～10cm程度の礫を含む。粘性・しまりがあり、しめり気も強い。東壁にはみられない。
- 4層：赤リブ褐色土(5/4/4)
5m前後の石がまばらに混ざる。若干の粘性がある。石室前庭部西壁では3層の下、東壁では2層の下に堆積する。



第12図 土層断面図

ないし2基の優越した古墳が認められる」ことも指摘した上で、石室長に主眼を置いてⅠ類(石室長3.0m～4.5m・石室幅1.0m～2.0m)、Ⅱ類(石室長5.0m～6.0m・石室幅1.0m～2.2m)、Ⅲ類(石室長6.5m～8.0m・石室幅1.0m～2.0m)、Ⅳ類(石室長8.0m～9.0m・石室幅1.5m～2.5m)、Ⅴ類(石室長10.0m以上・石室幅1.0m以上)の5類に分類し、B群のように石室の規模が各層とも認められる支群が存在する一方、A群・C群のようにⅠ～Ⅲ類の小・中規模の石室で構成される支群の存在を示した(三木1991)。F9号墳はA群のA1号墳・A6号墳や、C群のC1号墳同様、支群中で最大規模の墳丘と石室を持つものとなる。

(2) 調査区土層

2009年度の調査で確認した石室内の大型礫を、翌2010年度の調査の際におおむね除去した。この、除去した大型礫層は近世～近代以降に石室を埋めた際のもと考えられる。一方、今年度調査した土層はそれ以前に堆積した層を含む可能性があり、遺物の評価を行う上で区別をする必要がある。今年度掘り下げた範囲を第11図に図示した。

また、石室の開口方向に伸びるトレンチ南側にあたる8グリッド～11グリッドにおいて、東西の土層を記録した。今回検出した1層・2層は、2010年度・2011年度の出土遺物から近現代の埋土であることが判明している。

3層は東壁にはみられない層であり、石室前庭部にあたる8グリッド～11グリッドの中ほどにまで広がっていた。この層は後世の擾乱である可能性が高く、8グリッド・9グリッドから出土した遺物も原位置を保っていないと考えられる。現状で最下層にあたる地点に、4層がわずかに検出され、床面近くには埋葬時直後の堆積層が残存している可能性がある。

(鈴木)

第4節 出土遺物

(1) 古墳時代～古代の遺物

須恵器

須恵器片は45点出土した。そのうち器種の推定・判別が可能であった7点を報告した。時期については『須恵器集成図録』（斎藤・後藤編1995）を参照した。

<蓋杯>

本調査では蓋杯は4点が出土し、そのうち2点は2011年度に出土した破片と接合した。

蓋杯の蓋は、丸みを帯びて下方に内曲した器形である(第13図1、図版13-1)。器面調整はロクロ成形後にヘラ削りで調整がなされており外面上部にヘラ削り痕が確認できる。焼成は良好。色調は灰色(7.5Y6/1)、胎土は密で細砂・砂粒・黒色微粒子・白色微粒子がみられる。推定径17.3cm、器高2.3cm、B9グリッド出土。製作年代は猿投第IV期第1小期(8世紀第2四半世紀前半)と考えられる。

もう1点の蓋は、出土時には杯の底部と考えられたが、器面の調整が非常に丁寧であったことから蓋と判断した(第13図2、図版13-2)。器面調整はロクロ成形後に上部はヘラ削り、下部は横ナデで調整がなされている。焼成は良好。上部と下部で色調が異なり、上部が灰黄(2.5Y7/2)、下部が黄灰(2.5Y4/2)となっている。胎土は密で砂粒・白色微粒子がみられる。推定径8cm、残存高3.2cm、C3グリッド出土。製作年代は猿投第III期第3小期(8世紀第1四半世紀)と考えられる。

蓋杯の身の口縁部はたちあがり内傾して、外反した受部と浅いU字型を呈した器形をしている(第13図5、図版13-3)。器面はロクロによる成形がなされている。焼成は良好で、口縁部に自然軸の付着が確認できる。色調は自然軸の付着した部分が暗灰色(N3/0)で自然軸がはがれたと思われる部分が灰白色(2.5Y6/3)になっている。胎土は密で砂粒・白色微粒子・褐色微粒子がみられる。残存高約3.3cm、厚さ最大0.4cm、B2グリッド出土。製作年代は湖西第II期第3小期前～第4小期(6世紀第3四半世紀～7世紀初頭)と考えられる。

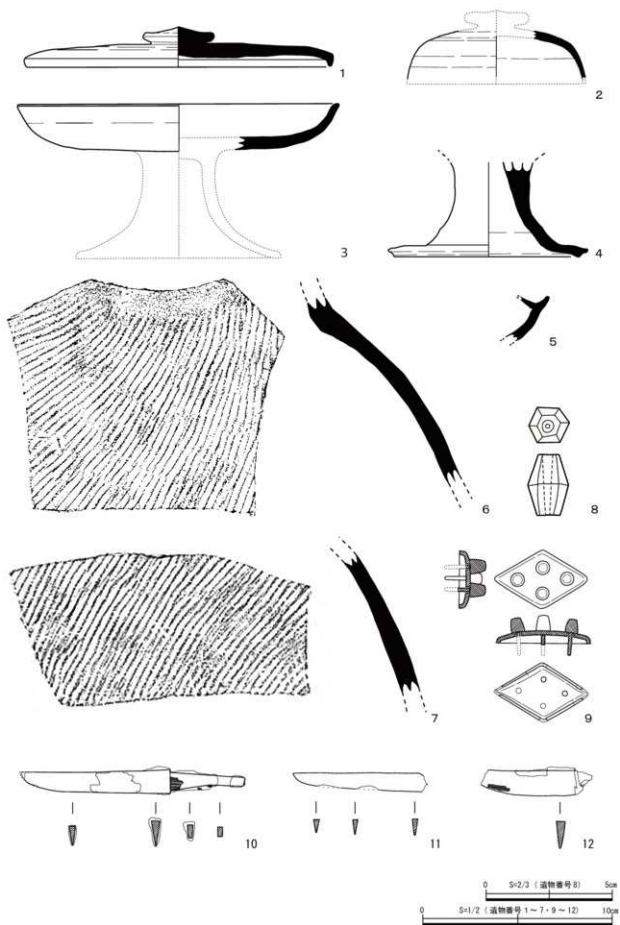
<高杯>

杯部破片は、2011年度報告書で蓋として報告した破片(同書第13図4)と接合した。外反した口縁から下方に内曲した器形である(第13図3、図版13-4)。器面調整はロクロ成形後にナデ調整がなされている。焼成は悪く、表面には全体的に磨減が確認できる。色調は浅黄色(2.5Y7/3)である。胎土はやや粗く砂粒・黒色微粒子・白色粒子・赤褐色微粒子がみられる。推定径8.5cm、残存高2.4cm、C3グリッド出土。製作年代は湖西第III期第3小期後～第IV期第2小期(7世紀第4四半世紀～8世紀第2四半世紀)と考えられる。

脚部破片は、中位までは弱く外反して下方に開き、下位で水平方向に大きく屈曲して外方にのびて端部に至る器形である(第13図4、図版13-5)。器面調整はロクロ成形の後にヘラ削りで調整がなされている。焼成は悪く、ところどころに磨減が確認できる。色調はにぶい黄色(2.5Y6/3)で、胎土はやや粗く砂粒・黒色微粒子・白色粒子・赤褐色微粒子がみられる。最大径5cm、残存高10.5cm、B7グリッド出土。製作年代は湖西第II期第5小期～第IV期第1小期(7世紀第1四半世紀～8世紀第1四半世紀)と考えられる。

<甕>

肩部破片は、なだらかに内湾した器形である(第13図6、図版13-6)。器面調整はタタキによる成形後、ナデ調整がなされていて、内側に縦に走るタタキ目と指の跡が確認できる。焼成は良好。色調は灰黄色(2.5Y7/2)で胎土は密で黒色微粒子・白色微粒子がみられる。残存高1.1cm、B6グリッド出土。



第13図 F9号墳出土遺物実測図

2010年度に出土した破片と接合したもう一点の肩部破片は、頸部に近い胴部で傾き具合から大型の甕と推測できる(第13図7、図版13-7)。器面調整は平行タタキによる成形後、内外面ともナデによる調整がなされている。内面に凹みがみられ、表面が綺麗な石をタタキの際に当て具として用いたと考えられる。焼成は良好。色調は灰色(10Y5/1)で、胎土は密で砂粒・黒色微粒子・白色微粒子がみられる。残存高8.7cm。B10グリッド出土。

土師器

土師器は小破片が4点出土したが器種が判断できるものは存在しなかった。すべて微細なため実測は行っていない。B8・B9・C6・C10グリッドから出土した。Bグリッドから出土したものは橙色(2.5YR6/8)と明赤褐色(2.5YR5/6)で、Cグリッドから出土したものは明赤褐色(5YR5/6)と橙色(5YR6/8)でどれも胎土に黒色微粒子、白色微粒子を含んでいる。

鉄製品

鉄製品は7点出土した。そのうち鉄製品残片3点は器種の判別ができなため実測を行わず、馬具1点と刀子3点のみ実測を行った。

<馬具>

菱形の飾金具である(第13図9、図版14-11・17)。X線撮影によって、飾り鉾が球ではなくバケツ型であると判明した。縦幅3.1cm、横幅4.9cm、飾りの鉾直径0.7cm。B9グリッド出土。製作年代は6世紀後半～7世紀と考えられる。

<刀子>

本調査では刀子と判断がつくものは3点出土した。そのうち1点は刃部先端を欠くが、ほぼ完形な刀子である(第13図10、図版14-8)。両間でまっすぐな背をもつ。刃部の片側に剥離痕があり、基部の両面に木質が残る。残存長11.7cm、刃部幅1.5cm、基部長4.1cm、背の厚さ0.6cm。B7グリッド出土。

他の2点は刃部のみ残存した刀子であり、1点は(第13図11、図版14-9・15)は、残存長7.8cm、刃部幅1.9cm、背の厚さ0.4cm。B5グリッド出土。もう1点は、峰側に剥離痕があり、刃部先端付近に鞘の破片らしき木質が残る(第13図12、図版14-10・16)。残存長6cm、刃部幅1.5cm。C6グリッド出土。

切子玉

水晶製の切子玉が1点出土した(第13図8、図版14-12)。完形の六角形状。孔幅が下端へ向かって狭まっていることから片側穿孔と考えられる。なお、孔の下端が欠けてやや広がっている。高さ2.4cm、最大幅1.6cm、最小幅0.9cm、孔の最大径0.4cm、孔の最小径0.2cm。C8グリッド出土。

(2) 近世以降の遺物

骨

ウシの左中手骨が1点、趾骨が3点出土している(図版14-13)。中手骨は大型の纒を除去したところ直立した状態で出土した。成獣の骨であり、動物による噛み跡が残っている。全長17.2cm、近位部幅は57.08mmと35.52mmである。B1グリッド出土。趾骨は近位部破片1点、遠位部破片2点である。近位部1点と遠位部1点は同一個体である。遺存状態から近世以降のものと推定される。

(岡野)

第V章 2012年度調査の成果

國學院大學考古学研究室は、2009年度から今年度まで、長野県安曇野市に所在する穂高古墳群F9号墳・F10号墳の調査を行ってきた。穂高古墳群F9号墳の調査目的は、継続的な学術調査および古墳群を構成する個々の古墳の現存状況を確認することで、穂高古墳群が持つ群集墳としての地域性、あるいは独自性を明確にしておくことである。2009年度の調査では、F9号墳とF10号墳の墳丘測量調査と並行し、穂高古墳群の周辺に分布する古墳の現状確認調査を行った。そして、個々の古墳の現在の状況と過去の調査・報告を照合して、どのように変化しているのかを明らかにするとともに、穂高古墳群について認知してもらい、後世に伝え残していく足がかりとしていくことを目的とした。2010年度の調査では、トレンチを2本設定し、石室内部の計測、石室側壁の把握と周溝による古墳の範囲と堆積状況の確認を目的とした調査を行った。その結果、東側から石室の側壁と思われる2段に重なった石材と数点の遺物を確認した。石室の範囲や羨道は、石室全体の発掘が終了していなかったため不明であった。2011年度の調査では、F9号墳の石室内部の発掘調査を行い、西壁と奥壁を確認し、須恵器や土師器、切子玉、中世以降の陶器、釘、硬貨などの遺物が出土した。2011年度も床面まで到達することができず、石室内部の全体の様相は不明であった。

今年度の調査は、昨年度に引き続き石室内部の発掘を行い、床面の検出と石室の構造の確認を目的とした。前年度と同様のトレンチを設定し、現代の地表面から最大約1m50cm下まで掘り下げた。奥壁付近の地面の礫石を除去したところ、床面と推測される明褐色のしまりのよい硬化面を一部検出した。石室の全体構造を確実に把握することはできなかったが、おおよその石室構造を把握することができた。石室は持ち送り構造を呈しており、石室長は約7mの規模がある。石室の入口と思われる部分では、閉塞石の残骸と推測される礫石も検出した。石材は花崗岩の川原石を使用していると思われる。石室内部の層の大部分が攪乱を受けているため、元の層位を保っているかは不明である。

出土遺物の総点数は60点である。土師器4点、須恵器45点、鉄製品は7点出土しており、馬具1点・刀子と認識できるものが3点、切子玉1点、破片を含めてウシの骨が3点出土している。今年度の遺物は主にB9・C9グリッドを中心に出土している。ウシの骨を除き今年度の発掘調査は後世の大規模な攪乱を受けていない層と考えられており、出土している須恵器から、おおよその年代は6世紀後半～8世紀初頭にしぼられる。

今年度の出土遺物の中では、穂高古墳群の中の別の古墳から出土している遺物と類似しているものがいくつかあった。このうち、菱形の飾金具は、D1号墳(魏石鬼窟)から出土例がある。D1号墳は、巨大な自然石の下を洞窟状に掘り込み、その内に石室を構築した特異な古墳である(三木 2006)。図示されていないがB23号墳(祝塚)からも菱形の飾金具の出土報告がある。その他に、今年は刀子のほぼ完成品が出土したがG1号墳(上原古墳)に類例がある。

来年度以降の課題は石室内部を完掘し、石室構造の全貌を明らかにすることである。そして周溝を確認し、墳丘の規模も把握することが課題となる。

(吉澤)

第VI章 おわりにあたって

2009年から始まった國學院大學考古学研究室による長野県安曇野市穂高古墳群F9号墳の発掘調査は、2012年度で第4次調査を迎えた。2009年度の第1次調査ではF9号墳・F10号墳の墳丘測量図作成と周辺地域の古墳群の現状確認を行い、2010年度の第2次調査ではF9号墳の発掘調査に取り掛かり、2011年度の第3次調査では第Iトレンチの拡張を行い石室の掘り下げを行った。今年度の調査では、石室の内部構造のさらなる解明、石室床面の検出を目的とし、前年度に続いて第Iトレンチの掘り下げを行った。

発掘調査に参加した実習生は、実習までの期間に考古学調査法の授業を通して調査に使用される機材の使用手法、図面の書き方などの技術を学んだ。また、毎週土曜日には勉強会を開き、穂高古墳群についての知識はもちろんのこと、穂高古墳群が所在する周辺地域に存在する各時代の遺跡などの概要について各々発表し合い、実習生同士の知識の向上をはかった。さらに、現場での作業に慣れるため、実習に使用する機材などの使用方法の練習も行い、調査に向けて準備を進めていった。しかし、実習本番では初めての現場での作業ということもあり、うまく立ち回ることができず、先生方や先輩方から多くのアドバイスを受けることにより、なんとか作業を進めていくことができた。幸い、今年度の調査時の天候は、前年度よりもめぐまれたため、作業が中断することも少なく、順調に掘り下げが進んだ。その結果、須恵器・切子玉・馬具・刀子などをはじめとした多くの遺物を出土し、トレンチの一部で石室床面と推測される部分を検出することができた。

調査後は実習生が主体となり、今後の整理作業、報告書作成の計画を立てて作業を進めていった。毎週土曜日の考古学調査法の授業時間や毎週土曜日の勉強会の時間、それ以外にも各々時間が空いている時間を利用し、図面整理・製作、出土遺物の接合・実測、原稿執筆などを行った。月に一度は各自が執筆した原稿を読み合わせ、実習生同士で意見交換をし、先生方、先輩方からもアドバイスを頂きながら原稿の修正・加筆を行った。作業が停滞し進まないことも多々あったが、実習生同士で協力し合い、ここに報告書の完成をみることも出来た。

今年度の調査では、一部とはいえF9号墳の石室床面の一部を検出できたことで、石室内部の全貌の解明にむけて大きく進むことができた。来年度以降の調査では、石室内部の全貌を明らかにするとともに、今回の調査では成し得なかった周溝の確認を目的とする。そして、F9号墳の実態を解明し、そこから得た情報を基に穂高古墳群の研究、さらには周辺地域に所在する古墳群の研究に生かしていただけると幸いである。

最後になりましたが、調査準備から報告書の完成に至るまで非常に長い期間に様々な点でご指導をしてくださった先生方、先輩方、そして今回の調査でご協力をいただいた全ての方々へ厚くお礼を申し上げます。

(羽喰・吉澤)

引用・参考文献

- 明科町教育委員会編 1991 『ほうろく屋敷遺跡—川西地区県営場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第3集
- 1994 『長野県東筑摩郡明科町遺跡詳細分布調査報告書 明科町の遺跡』明科町の埋蔵文化財第4集
- 1995 『上生野遺跡』明科町の埋蔵文化財第5集
- 1997 『塩田若宮遺跡』明科町の埋蔵文化財第10集
- 2000 『明科庚寺址』明科町の埋蔵文化財第7集
- 2001 『ほうろく屋敷遺跡Ⅳ—個人住宅建築工事に伴う第4次緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第11集
- 2002 『栄町遺跡—「子どもと大人の交流学習施設」建設に伴う緊急発掘調査—』明科町の埋蔵文化財第6集
- 2005 『潮神明宮前遺跡Ⅱ—町道拡幅改良工事に伴う緊急発掘調査報告書—』明科町の埋蔵文化財第13集
- 明科町教育委員会内明科町史刊行会編 1984 『明科町史』上巻
- 朝日村教育委員会編 2003 『熊久保遺跡第10次発掘調査報告書—松本平西山山麓における縄文時代中期の集落址—』朝日村文化財調査報告書第1集
- 安曇村編 1998 『安曇村誌』第1巻自然編
- 安曇野市教育委員会編 2006 『東小倉遺跡Ⅴ』安曇野市の埋蔵文化財第1集
- 2009 『三枚橋・藤塚遺跡 安曇野市穂高交流学習センター建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第2集
- 2010 『安曇野市埋蔵文化財包蔵地図』
- 2011 『塩田若宮遺跡(第2次)』安曇野市の埋蔵文化財第4集
- 2012 『平成22年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第5集
- 2013 『平成23年度安曇野市埋蔵文化財発掘調査報告書』安曇野市の埋蔵文化財第6集
- 池田町教育委員会編 1977 『鬼の釜古墳』
- 石部正志 1980 『群集墳の発生と古墳文化の変質』『東アジア世界における日本古代史講座』第4巻 学生社、370-402頁
- 伊藤真人 1983 『北アルプス南東部 蝶ヶ岳付近の氷河地形と堆積段丘』『地質学評論』第56巻第1号 古今書院、35-49頁
- 今井眞樹 1933 『穂高町上原の竪穴式石室跡古墳』『史跡名勝天然記念物調査報告書』第44輯 長野県・長野県教育委員会、64-66頁
- 岩崎卓也 1989 『第二章 古代社会の基礎』『長野県史』通史編第1巻 長野県史刊行会、204-286頁
- 岩崎卓也・松尾昌彦・松村公仁 1983 『有明古墳群の再調査』『信濃』第35巻11号 信濃史学会、32-60頁
- 上田市立信濃函分寺資料館編 2005 『信濃の古代・中世の仏教文化と関連遺跡』
- 大阪府教育委員会編 1976 『陶色Ⅰ』
- 大阪府立弥生文化博物館編 2001 『平成13年秋季特別展 弥生クロスロード—再考・信濃の農耕社会—』
- 太田伯一郎 1923 『第三章第三節 遺跡(古墳)』『南安曇郡誌』(旧版) 南安曇郡教育會、211-231頁
- 太田陽子ほか編 2010 『日本列島の地形学』財団法人東京大学出版会
- 大場磐雄・永峯光一・原 嘉藤 1963 『長野県東筑摩郡四賀村井刈遺跡調査概報』『信濃』第15巻第12号 信濃史学会、1-20頁
- 大場磐雄・原 嘉藤 1961 『長野県塩尻市柴宮宮見の銅鐸』『信濃』第13巻第4号 信濃史学会、2-20頁
- 大町市教育委員会編 1979 『長野県大町市借馬遺跡緊急発掘調査報告書 借馬遺跡Ⅰ』
- 1985 『長野県大町市埋蔵文化財緊急発掘調査報告書 借馬遺跡Ⅳ・花見遺跡』大町市埋蔵文化財調査報告書第9集
- 1988 『長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 来見原遺跡Ⅱ』大町市埋蔵文化財調査報告書第14集
- 1990 『長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 一津』大町市埋蔵文化財調査報告書第16集
- 1991 『長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 古城遺跡』大町市埋蔵文化財調査報告書第19集
- 1992 『長野県大町市埋蔵文化財包蔵地緊急発掘調査報告書 中城原遺跡』大町市埋蔵文化財調査報告書第20集
- 大町市史編纂委員会編 1985 『大町市史』第2巻原始・古代・中世編
- 小野山節 1975 『帯金具から冠へ』『古代史発掘6 古墳と国家の成り立ち』講談社、112-123頁
- 河西清光・松尾昌彦 1984 『穂高古墳群』『長野県史』考古資料編(3) 長野県史刊行会、219-230頁

- 春日賢一 1921 「北安曇郡に於ける古墳」『信濃教育』第417号 信濃教育會事務所、18-22頁
- 桐原 健 1980 「松本市中山の古墳・古墳群—既掘古墳記録と中山考古資料館収蔵資料の提示」『長野県考古学会誌』第36号 長野県考古学会、22-44頁
- 1991 「第二章第三節 古墳時代」『徳高町誌』第2巻歴史編上・民俗編 徳高町誌刊行会、57-99頁
- 1996a 「第二編第二章第一節 弘法山古墳の時代」『松本市史』第2巻歴史編Ⅰ 松本市、300-313頁
- 1996b 「第二編第二章第二節 古墳文化の発展」『松本市史』第2巻歴史編Ⅰ 松本市、314-325頁
- 2002 「明科庵寺が提起する問題」『信濃』第54巻12号 信濃史学会、55-61頁
- 2004 「信濃の東山道新駅にかかわる推論」『信濃』第56巻10号 信濃史学会、40-49頁
- 弘法山古墳発掘調査報告書刊行委員会編 1978 『弘法山古墳長野県松本市弘法山古墳調査報告』松本市教育委員会
- 國學院大學文学部考古学研究室編 2010 『長野県安曇野市徳高古墳群2009年度墳丘測量調査・現状確認調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第44集
- 2011 『長野県安曇野市徳高古墳群2010年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第45集
- 2012 『長野県安曇野市徳高古墳群2011年度発掘調査報告書』國學院大學文学部考古学実習報告第46集
- 小林秀夫 1997 「千曲川流域における古墳の動向—5世紀代古墳を中心にして」『長野県考古学会誌』第82号 長野県考古学会、80-100頁
- 近藤義郎 1966 「農民と耳飾り」『考古学研究』第13巻第1号 考古学研究会、46-48頁
- 近藤義郎編 1952 『佐良山古墳群の研究』津山市
- 斎藤考正・後藤健一編 1995 『須志器集成図録』第3巻東日本編Ⅰ、雄山閣出版
- 猪田文紀 1931 「南安曇郡徳高町上原区古墳発掘に就て」『信濃考古学会誌』第2年第5・6輯 信濃考古学会、168-171頁
- 1933 「南安曇郡徳高町上原区古墳発掘に就て」『史蹟名勝天然記念物調査報告』第14輯 長野県・長野県教育委員会、61-81頁
- 塩尻市教育委員会編 1980 『史跡平出遺跡遺構確認調査報告書—昭和54年度—
- 1981 『史跡平出遺跡遺構確認調査報告書—昭和55年度—
- 1982a 『史跡平出遺跡遺構確認調査報告書—昭和56年度—
- 1982b 『男屋敷—長野県塩尻市男屋敷遺跡発掘調査報告書—
- 1983a 『丘中学校遺跡—長野県塩尻市丘中学校遺跡発掘調査報告書—
- 1983b 『史跡平出遺跡—昭和57年度発掘調査報告書—
- 1985 『堂の前・福沢・青木沢 塩尻東地区県営園場整備事業発掘調査報告書—昭和59年度—
- 1986a 『吉田川西遺跡—吉田長畠地区園整理事業発掘調査報告書—
- 1986b 『長野県塩尻市埴原遺跡発掘調査概報』
- 1986c 『史跡平出遺跡—環境整備報告書—
- 1987a 『田川端・宗張—塩尻東地区県営園場整備発掘調査報告書—
- 1987b 『史跡平出遺跡 昭和61年度県営かんがい排水事業中層平地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1988a 『一般国道20号(塩尻バイパス)改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』
- 1988b 『和手遺跡—塩尻市市道と手北線道路新設改良工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—
- 1991a 『中挟・五日市場—塩尻市枝敷長畠土地改良事業共同施行埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—
- 1991b 『高瀬沢遺跡発掘調査報告書』
- 1991c 『北原遺跡農業集落排水事業宗賀南部地区関連工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 1992 『丘中学校遺跡—塩尻市丘中学校改築工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—
- 1994 『矢口・唐沢南遺跡発掘調査報告書』
- 1995 『東山・下り坂遺跡—市民いこいの森整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—
- 1996 『和手遺跡—高出と手協同事業用地造成工事埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—
- 1997a 『和手遺跡—カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅰ—
- 1997b 『和手遺跡—カインズホーム建設に伴う緊急発掘調査報告書Ⅱ—
- 1998 『下境遺跡—片丘住宅団地造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—
- 1999 『北原遺跡農業集落排水事業宗賀南部地区関連工事に伴う緊急発掘調査報告書』
- 2000 『中挟遺跡』
- 2002 『女夫山ノ神・牛壳沢・鷺ヶ沢遺跡—今泉南テクノヒルズ基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—
- 2004 『史跡平出遺跡—平成14年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る発掘調査報告書—

- 2006 『史跡平出遺跡—平成16年度記念物保存修理事業(環境整備)に係る発掘調査概報—』
- 2009 『史跡平出遺跡—平成19年度史跡等総合整備活用推進事業に係る発掘調査概報—』
- 2010 『史跡平出遺跡—平成20年度史跡等総合整備活用推進事業に係る発掘調査概報—』
- 塩尻市誌編纂委員会編 1995『塩尻市誌』第2巻歴史編 塩尻市
- 重野昶茂 1991『第1章総論』『徳高町誌』自然編 徳高町誌刊行会、4-8頁
- 2003『鳥川扇状地の自然開発と古代開発』『信濃』第55巻第5号 信濃史学会、334-342頁
- 信濃史料刊行会編 1956『信濃史料』第1巻上 信濃史料刊行会
- 信濃毎日新聞 2013『軒丸瓦 同じ版型使用か』(1月15日版)
- 白石太一郎 1973『大型古墳と群集墳』『樞原考古学研究所紀要考古学論叢』第2冊、93-120頁
- 鷹野秀広 1890『信濃原有明村ノ古墳』『東京人類学会類誌』第5巻52號 東京人類学会、317-318頁
- 鳥居龍藏 1925『有史以前の跡を尋ねて』雄山閣、126-199頁
- 鳥羽嘉彦 2010『松本平南部における巨大縄文集落の形成』『平出博物館紀要』第27集 塩尻市立平出博物館、15-29頁
- 豊科町誌編纂委員会編 1995『豊科町誌』歴史編・民俗編・水利編
- 豊科町教育委員会編 1992『吉野町館跡遺跡 県営場整備事業豊科南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 豊科町郷土博物館編 1999『土器づくりのムラを掘る—上ノ山窯跡群・葛藤平窯跡群の発掘調査—』
- 豊科町東山遺跡調査会編 1999『筑摩東山 上ノ山窯跡群・葛藤平窯跡群発掘調査報告』
- 中島豊晴 1976『徳高町塚原F1号墳調査概報』『長野県考古学会誌』第25号 長野県考古学会、55-57頁
- 長野県編 1989『長野県史』通史編第1巻 長野県史刊行会
- 1983『長野県史』考古資料編(3) 長野県史刊行会
- 長野県教育委員会編 1969『昭和42年度国鉄複線化等開発地域内埋蔵文化財緊急分布調査報告書』
- 長野県文化財保護協会編 1976『上原』
- 長野県埋蔵文化財センター編 1988『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書2—塩尻市内その1』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書2
- 1989『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書3—塩尻市内その2—吉田川西遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書3
- 1990『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書7—松本市内その4—南栗遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書7
- 1993『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書11—明科町内—北村遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書14
- 1997『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書1—徳高古墳群—近世集石遺構の調査』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書23
- 2003『国営アルプスあづみの公園埋蔵文化財発掘調査報告書2—大町市内その1—山の神遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書60
- 2005『安曇野農業水利事業あづみ野排水路埋蔵文化財発掘調査報告書—三郷村内—三角原遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書76
- 2012『中野市柳沢遺跡』長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書100
- 新納 泉 1983『裝飾付き大刀と古墳時代後期の兵制』『考古学研究』第30巻第3号 考古学研究会、50-70頁
- 西嶋定生 1961『古墳と大和政権』『岡山史学』第10号 岡山史学会、154-207頁
- 仁科良夫 1991『第2章 地形と地質』『徳高町誌』自然編 徳高町誌刊行会、11-48頁
- 日本地質学会編 2006『中部地方』日本地方地誌4 朝倉書店
- 日本地誌研究所編 1972『日本地誌』第11巻 長野県・山梨県・静岡県 二宮書店
- 藤沢宗平 1968『第四章 古墳文化とそれ以降の文化』『南安曇郡誌』第2巻上 南安曇郡誌改訂編纂会、90-140頁
- 原 明芳 1996『第三章第一節 律令体制成立期の社会のうごき』『松本市史』第2巻歴史編1 松本市、372-406頁
- 原 嘉藤・小松 虔 1972『長野県松本市中山第36号墳(仁能田山古墳)調査報告』『信濃』第24巻第5号 信濃史学会、61-76頁
- 平出遺跡調査会編 1955『平出 長野県宗賀村古代集落遺跡の総合研究』朝日新聞社
- 徳高町・徳高町教育委員会編 1989『徳高町の古墳とその人々』
- 徳高町教育委員会編 1970『徳高町の古墳』柳沢書苑
- 1972『長野県南安曇郡徳高町離山遺跡発掘調査報告書』
- 1987『徳高町矢原遺跡群(馬場街道遺跡)—県道柏矢町～田沢俣拡幅工事に伴う緊急発掘調査報告—』

- 2001a『穂高町一本松・神の木・宗徳寺・南原遺跡 穂高沢水系による開発沢、上原古墳』
 2001b『穂高町他谷遺跡』
- 穂高町誌編纂委員会 1991a『穂高町誌』自然編 穂高町誌刊行会
 1991b『穂高町誌』第2巻歴史編上・民俗編 穂高町誌刊行会
- 本郷村教育委員会編 1966『信濃浅間古墳』
 松川村教育委員会編 1968『有明山社』
 松川村誌編纂委員会編 1988『松川村誌』歴史編
- 町田洋ほか編 2006『日本の地形5』中部、財団法人東京大学出版会
- 松本市編 1996a『松本市史』第1巻自然編 松本市
 1996b『松本市史』第2巻歴史編1 原始・古代・中世 松本市
- 松本市教育委員会編 1972『長野県松本市女鳥羽川遺跡緊急発掘調査報告書 昭和45年度』
 1986『松本市宮瀨本村遺跡』松本市文化財調査報告No.45
 1987『松本市宮瀨本村遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.52
 1988『松本市林山腰遺跡』松本市文化財調査報告No.61
 1989a『松本市千鹿頭北遺跡県営ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.69
 1989b『松本市宮瀨本村遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告No.77
 1990a『松本市坪ノ内遺跡』松本市文化財調査報告No.80
 1990b『松本市向畑遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告No.83
 1990c『松本市三の宮遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.84
 1990d『松本市北栗遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.85
 1990e『松本市小原遺跡』松本市文化財調査報告No.86
 1991a『松本市生妻遺跡緊急発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.89
 1991b『針塚古墳の発掘』
 1993a『埴原北遺跡 中山古屋敷遺跡 推定信濃諸牧牧監庁跡Ⅱ 小丸山古墳』松本市文化財調査報告No.101
 1993b『松本市針塚遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告書No.102
 1993c『松本市大村古屋敷遺跡/前田遺跡』松本市文化財調査報告書No.103
 1993d『弘法山古墳出土遺物の再整理—新発見資料を中心とした土器とガラス製小玉の整理』松本市文化財調査報告No.111
 1993e『松本市下原遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.106
 1993f『松本市百瀬遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.108
 1997a『小池遺跡Ⅱ・ツツ家遺跡』松本市文化財調査報告No.126
 1997b『エリ穴遺跡』松本市文化財調査報告No.127
 1998『長野県松本市境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』松本市文化財調査報告No.130
 1999『長野県松本市高宮遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.136
 2000a『松本市平瀬遺跡Ⅱ』松本市文化財調査報告No.142
 2000b『長野県松本市大輪原遺跡』松本市文化財調査報告No.146
 2000c『長野県松本市出川南遺跡Ⅷ』松本市文化財調査報告No.157
 2000d『松本市平瀬遺跡Ⅲ』松本市文化財調査報告No.142
 2001『長野県松本市百瀬遺跡Ⅳ』松本市文化財調査報告No.151
 2003a『長野県松本市平田本郷遺跡Ⅳ・Ⅴ』松本市文化財調査報告No.166
 2003b『長野県松本市桜ヶ丘古墳 再整理報告書』松本市文化財調査報告No.170
 2003c『中山古墳群・銀形原遺跡・銀形原磐石』松本市文化財調査報告No.168
 2004『中山古墳群・銀形原遺跡・銀形原磐石』松本市文化財調査報告No.175
 2005a『長野県松本市大村遺跡Ⅵ』松本市文化財調査報告No.177
 2005b『松本市立考古博物館リニューアル記念シンポジウム報告書 松本市の発掘を語る。』
 2006『長野県松本市岡田西裏遺跡Ⅷ』松本市文化財調査報告No.182
 2008a『長野県松本市下出口遺跡』松本市文化財調査報告No.192
 2008b『長野県松本市 中山古墳群14・15 カニホリ東・西遺跡』松本市文化財調査報告No.196
 2009『長野県松本市出川南遺跡』松本市文化財調査報告No.198
- 松本盆地団体研究グループ 1977『松本盆地の第四期地質—松本盆地の形成過程にかかわる研究(3)—』『地質学論集』

- 第14号 日本地質学会、93-102頁
- 三木 弘 1990 『魏石鬼窟古墳を利用した修験道』『徳高町郷土資料館』第12号
 1991 『有明古墳群の再検討(1)』『信濃』第43巻第12号 信濃史学会、14-30頁
 2006 『有明古墳群の再検討(2)-魏磯城窟古墳の再考を通じて-』『長野県考古学会誌』118号 長野県考古学会、179-193頁
- 三木 弘・寺島俊郎・西山克己 1987 『長野県安曇野郡他高町所在魏石鬼窟古墳について』『信濃』第39巻第5号 信濃史学会、179-193頁
- 三郷村教育委員会編 1999 『三郷村埋蔵文化財(資料集)』三郷村の埋蔵文化財第4集
 2003 『東小倉遺跡Ⅲ』三郷村の埋蔵文化財第5集
 2005a 『東小倉遺跡Ⅳ』三郷村の埋蔵文化財第6集
 2005b 『三郷村埋蔵文化財Ⅱ 発掘調査・試掘調査報告書』三郷村の埋蔵文化財第7集
- 水野正好 1970 『群集墳と古墳の終焉』『古代の日本5 近畿』角川書店、195-212頁
 1975 『群集墳の構造と性格』『古代史発掘6 古墳と国家の成り立ち』講談社、143-158頁
- 宮坂光次 1922 『信州南安曇郡有明村ドルメン類似の古墳に就いて』『人類学雑誌』第37巻第9号 東京人類學會、299-304頁
- 向坂綱二 1964 『古墳群の群別に関する概念規定』『考古学手帖』21 塚田光、7-8頁
- 森 浩一・石部正志 1962 『後期古墳の討論を回顧して』『古代学研究』第30号 古代学研究会、1-6頁
- 藪崎志穂 2012 『名水を訪ねて(99) 松本盆地周辺の名水』『地下水学会誌』第54巻第4号 日本地下水学会、229-247頁
- 山形村教育委員会編 1971 『三夜塚遺跡 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区緊急発掘調査報告書』山形村遺跡発掘調査報告書第3集
 1972 『神明遺跡・三夜塚遺跡 県営圃場整備事業東筑摩郡山形村竹田地区緊急発掘調査報告書』山形村遺跡発掘調査報告書第4集
 1997 『淀の内遺跡』山形村遺跡発掘調査報告書第7集
 2001 『淀の内遺跡Ⅳ』山形村遺跡発掘調査報告書第11集
 2009 『下原遺跡・三夜塚遺跡Ⅳ』山形村遺跡発掘調査報告書第15集
- 雪野山古墳発掘調査団 1996 『雪野山古墳の研究』報告篇
- 和田晴吾 1992 『群集墳と終末期古墳』『新版古代の日本5 近畿1』角川書店、325-350頁
 2007 『古墳群の分析視角』『関東の後期古墳群』六一書房、7-32頁

発掘調査参加者・関係者一覧

平成24年度考古学実習生

池田雅英・稲垣大地・太田哲平・鈴木志徳・曾我真実子・豊島寿呂子・島海朱理・羽喰智生・森田 光・
吉澤花織・渡邊里美

発掘特別参加者

浅海莉絵・岩井優莉佳・岡野賢人・岡山亮子・北澤宏明・小林美貴・酒匂喜洋・嶋崎明音・新川実里・戸田千曉・
富山悠加(以上國學院大學学生)・朝倉一貴・有福小百合・枝野孝彦・大日方一郎・加藤大二郎・藏野泰洋・日野
正祥(以上國學院大學大学院生)・位田英騎・上田 翼・斎藤 唯・久我谷漢太・中島金太郎・山口 晃(以上國
學院大學卒業生)・高垣美葉子(以上國學院大學栃木短期大学)・中村佳代・藤岡泰裕・藤松慎一郎(以上徳高北小
学校)

調査協力機関・協力者

国土交通省関東地方整備局国営アルプスあづみの公園事務所・アルプスあづみの公園管理JV・長野県教育委員
会・安曇野市教育委員会・安曇野市穂高郷土資料館・安曇野市豊科郷土博物館・ビジネスインあづみ野・長野県
立歴史館・松本市考古博物館・あづみの公園歴史愛好会・帝京大学文化財研究所・渋谷氷川神社

青木 敬・池田榮史・石橋 宏・石守 晃・伊藤 愛・伊藤慎二・稲田美里・内川隆志・内堀 団・大田圭郁・
大塚皓平・岡崎裕子・片山裕介・加藤里美・桐原 健・柳原功一・後藤雅彦・小林信一・小林文昭・小宮美紀・
小山高志・笹生 衛・禎 碧・篠遠富恵・島田哲男・榎山林繼・関 広克・高野晶文・武田芳雅・多田博志・土
屋和章・那須野雅好・成田 裕・服部和弘・原 智之・平林 彰・古谷 毅・松井雅彦・松村誠支・三木 弘・
山岸美夫・山下泰永・山田真一・山本 肇

写真図版



F 9号填石室内部



F 9号墳トレンチ全景（南から）

図版 2



F 9号墳トレンチ全景（北から）



1 F 9号墳石室（北西から）



2 F 9号墳石室（南から）

図版 4



1 F9号墳奥壁（南から）



2 F9号墳石室（南東から）



1 F 9号墳石室西壁（東から）



2 F 9号墳D1・D2グリッド西壁（東から）

図版 6



1 F 9号墳D 3・D 4グリッド西壁（東から）



2 F 9号墳D 5・D 6グリッド西壁（東から）



1 F 9号墳石室東壁（西から）



2 F 9号墳A1・A2グリッド東壁（西から）

図版 8



1 F9号墳A3・A4グリッド東壁（西から）



2 F9号墳A5・A6グリッド東壁（西から）



1 F9号墳前庭部西壁（東から）



2 F9号墳前庭部東壁（西から）

図版10



1 F9号墳D7・D8グリッド西壁（東から）



2 F9号墳D9・D10グリッド西壁（東から）



1 F9号墳A7・A8グリッド東壁（西から）



2 F9号墳A9・A10グリッド東壁（西から）

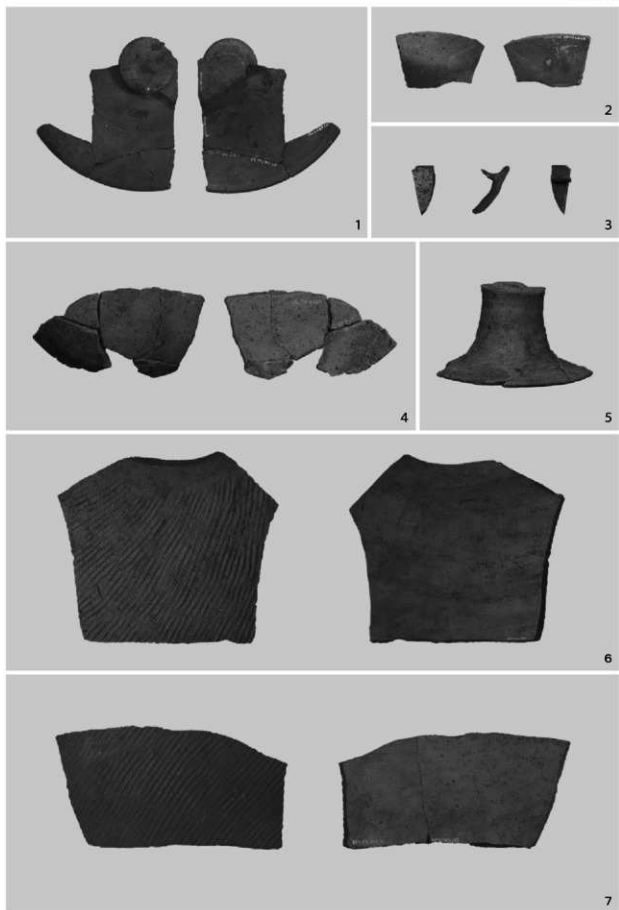
図版12



1 F9号墳発掘前全景（南東から）

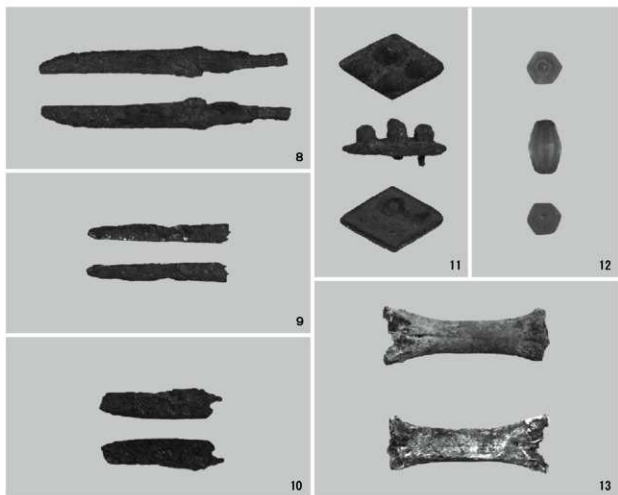


2 F9号墳埋め戻し後全景（南東から）

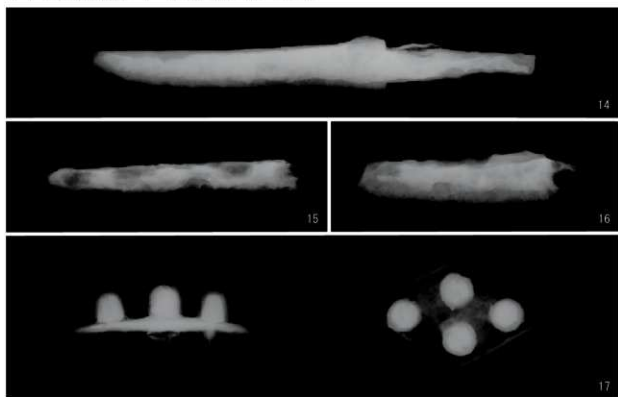


F 9号填出土器 (S=1/2)

図版14



1 F9号墳出土遺物 S=2/3 (13のみS=1/3)



2 F9号墳出土鉄製品X線写真(等倍)

報告書抄録

ふりがな	ながのけんあづみのし ほたかこふんぐん 2012ねんどはつつちょうさほうこくしょ							
書名	長野県安曇野市 穂高古墳群 2012年度発掘調査報告書							
シリーズ名	國學院大學文学部考古学実習報告							
シリーズ番号	第48集							
編著者名	(編集) 吉田恵二 中村耕作 深澤太郎 (著者) 池田雅英 稲垣大地 太田哲平 岡野賢人 鈴木志徳 曾我真実子 豊島寿呂子 烏海朱理 羽喰智生 森田 光 吉澤花織 渡邊里美							
編集機関	國學院大學文学部考古学研究室							
所在地	〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28 TEL03(5466)0248							
発行年月日	2013(平成25)年7月31日							
遺跡名	所在地	市町村番号	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ほたかこふんぐん群 F9号墳	長野県安曇野市 穂高柏原3653	20220	2-F9 (穂高古墳78)	36° 19' 08"	137° 51' 29"	20120804 ～ 20120812	26.25㎡	学術調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構・遺物			特記事項		
穂高古墳群 F9号墳	古墳	古墳後期 中世 近世・近代	直径17.0m、高さ1.32mの円墳。 須恵器片(杯、長頸瓶口頸部、 子持壺など)、土師器片、馬具、 刀子、切子玉、骨が出土。			鳥川扇状地の南側に位置する F群の中で最も上位に位置し、 二つ塚と通称される2基の古 墳の1基。		
要約								
2009年度から始まった國學院大學考古学調査法(考古学実習)の一環とした学術調査の4年目を迎えた。今年度は、昨年度に引き続きF9号墳の発掘調査を行い、石室内部の規模を確認する目的で行なった。そして、石室奥壁及び東西両壁を検出したことにより、石室長約7.0m、幅約1.3～1.5mの規模で、床面と推測される部分を一部検出した。トレンチ内から出土した遺物は須恵器・土師器・馬具・切子玉・刀子などがある。出土した須恵器は、おおよそ6世紀後半～8世紀初頭である。								

文化財保護・教育普及・学術研究を目的とする場合は、著作権(発行)者の承諾なく、この報告書を複製して利用できます。なお、利用にあたっては出典を明記してください。なお、PDF版を長野県遺跡資料リポジトリで公開しています。

國學院大學文学部考古学実習報告 第48集

長野県安曇野市

穂高古墳群

2012年度 発掘調査報告書

2013年7月31日 発行

編集 吉田 恵二

中村 耕作

深澤 太郎

発行 國學院大學文学部考古学研究室

〒150-8440 東京都渋谷区東4-10-28

電話 03 (5466) 0248

印刷 よしみ工業株式会社
